

清末小説から 151

2023.10.1

- 蘆花「少年軍」と喋血生「少年軍（一）」……………樽本照雄 1
- 蘆花「王の紛失」の漢訳2種——羅普、喋血生……………沢本香子10
- 蘆花「巢鴨奇談」と喋血生「雌雄蜥」……………荒井由美24
- 蘆花「大陰謀」と喋血生「専制虎」……………神田一三32
- 喋血生「消露」について……………沢本郁馬41
- 清末小説から24、41、46

★喋血生漢訳作品関連の文章が集まりました。本号は徳富蘆花の日本語訳を底本に使用した作品です（ただし「消露」を除く）。次号も喋血生漢訳についての論文を掲載する予定です。ご関

清末小説研究会 日本〒520-0801 滋賀県大津市におの浜2-2-5 212号 樽本照雄方

蘆花「少年軍」と喋血生「少年軍（一）」

樽本照雄

漢訳になるまで

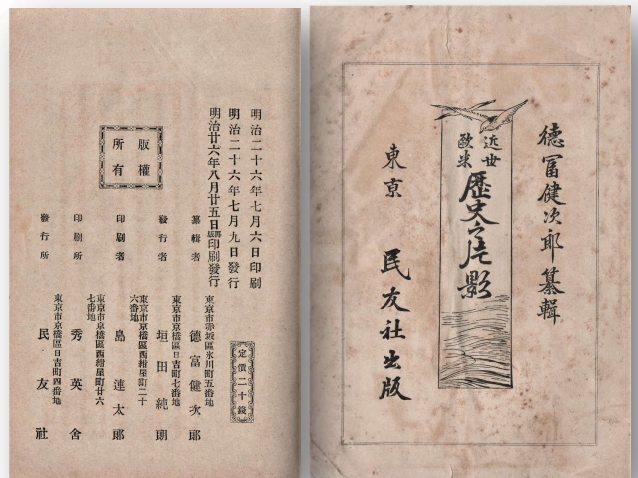
徳富蘆花（本名健次郎、1868-1927）「少年軍」の初出が『国民之友』であることは竇新光（2019）*1が指摘している（中村忠行、渡辺浩司、李艶麗、梁艶、梁艶+王玉ほかの研究は樽目録の注釈を参照のこと）。

まず初出について少し補足して簡単に説明す

る。

無署名「南北戦争の少年軍」上下は『国民之友』第103、104号（1890.12.13、23）の「雑録」欄に掲載された（国立国語研究所蔵）。

もとは無署名である。後に「少年軍（南北戦争の花）」と改題した。さらに挿絵（久保田金僊）を添えて徳富健次郎纂輯『歴史之片影』（民友社1893.7.9/8.25再版）に収録する。奥付は徳富健次郎。本稿では単行本を使用する。





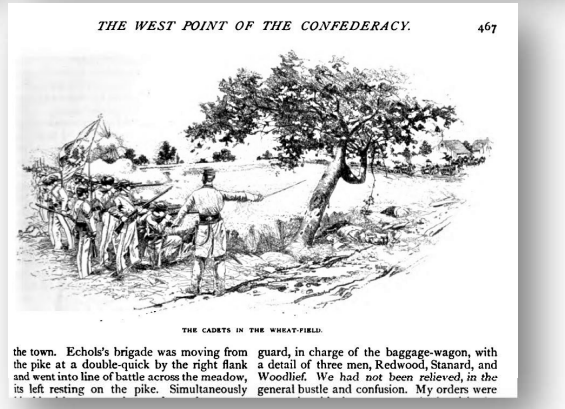
少年軍
軍事小説

時維一千八百六十二年之春。余年十五。欲。軍。事。學。習。而。無。由。也。乃。聞。人。言。曰。軍。事。學。習。之。法。在。於。軍。中。而。軍。中。之。學。習。之。法。在。於。軍。中。之。將。領。之。訓。示。也。余。聞。之。心。悅。誠。服。乃。自。是。日。始。入。軍。中。學。習。軍。事。之。法。矣。余。在。軍。中。之。時。日。甚。久。所。見。所。聞。之。事。無。不。詳。盡。記。之。於。此。以。告。世。人。也。

龍。野。我。少。年。其。語。其。大。意。略。來。出。身。家。中。

時。維。千。八。百。六。十。二。年。之。春。余。年。十。五。欲。軍。事。學。習。而。無。由。也。乃。聞。人。言。曰。軍。事。學。習。之。法。在。於。軍。中。而。軍。中。之。學。習。之。法。在。於。軍。中。之。將。領。之。訓。示。也。余。聞。之。心。悅。誠。服。乃。自。是。日。始。入。軍。中。學。習。軍。事。之。法。矣。余。在。軍。中。之。時。日。甚。久。所。見。所。聞。之。事。無。不。詳。盡。記。之。於。此。以。告。世。人。也。

龍。野。我。少。年。其。語。其。大。意。略。來。出。身。家。中。



蘆花日記にもとづいた漢訳が漢訳者名不記「(軍事小説)少年軍」だ。『浙江潮』第1期(光緒二十九年正月二十日(1903.2.17))。初版の「訳者乃曰」について再版本では加筆された部分がある)に掲載された。正確に言えば題名は「少年軍(一)」ではない。「一」の表示はないということだ。しかし該『浙江潮』に(二)(三)という同題名別内容のものが掲載されているから区別するために記入している。またそれとの関係で訳者が喋血生だとわかる。

蘆花の原作
蘆花が使用した原作は次のとおり。
JOHN S. WISE “THE WEST POINT OF THE CONFEDERACY./BOYS IN BATTLE AT NEW MARKET, VIRGINIA, MAY 15, 1864” (“THE CENTURY MAGAZINE” Vol. 37, No.3, 1889.1) pp.461-471. googlebooks所収
題名は「連合国のウエストポイント。1864年5月15日ニューマーケットにおける少年たち」。原作者ジョン・S・ワイズ(1846-1913)に講演本“BATTLE OF NEW MARKET, VA, MAY 15th, 1864.: AN ADDRESS” 1882年版がある。同内容だが文章が違うし挿絵を根拠にして底本は『センチュリー誌』掲載のものと判断した。
「連合国」とはアメリカ南部連合国を指す。

原作は南北戦争におけるニューマーケットの戦いを舞台にした実話だ。
いくつかの文献によってまとめる。バージニア士官学校(Virginia Military Institute)の士官候補生部隊(主として14-17歳)が南軍第62連隊と共に戦い北軍フランツ・シーゲル少将の部隊を打ち負かした。南軍が北軍に勝利した戦

闘である。参戦した200名を超える（原作では225名）少年からも10名の死者と多くの負傷者が出た。原作者ワイズもその戦いに参加した。彼の体験にもとづいた作品が蘆花の原作となっている。

蘆花日訳といっているが正確に書けば逐語的な翻訳ではない。単行本に「纂輯」とあるように編集している。つまり原作の記述を取捨選択した。別の言いかたをすれば削除しながら一部を書き換えて大筋を示している。抄訳といっている。原作には地名人名などの固有名詞が多数出てくる（少年軍（一）固有名詞対照表を参照）。それらを部分的に省略する。おおざっぱに言えば約3割を翻訳していない。戦争実録ではなく小説とするならばそれくらい簡略化する必要があった。

蘆花と喋血生漢訳

原作の冒頭を掲げる。

【原作】 Lexington, Virginia, is a somewhat historic spot now, being the burial-place of Robert E. Lee and of "Stonewall" Jackson; and it is by no means inaccessible, having no fewer than three railroads. When I first knew it, nearly twenty-five years ago, it not only had little pretense to fame, but was one of the most out-of-the-way spots in the State.

バージニア州レキシントンにはロバート・E・リーと「ストーンウォール」ジャクソンの墓がある由緒ある場所だ。鉄道が3本も通っていて決して行きにくいというわけではない。私が初めてこの地を知ったのは今から約25年前であるが、その当時は有名であるどころか州内でも最も辺鄙な場所であった。

リーは南軍司令官、ジャクソンは彼の片腕と

称された。物語の場所を説明することからはじめる。続いてバージニア士官学校の歴史を述べる。作者は戦闘の体験者だから日時、人名と地名は詳細に記録する。それを蘆花と喋血生はどう処理したかもひとつの見どころだ。

蘆花は原作の冒頭部分を省略した。そのかわりに「前言」ともいうべき文章を最初に置く。

【蘆花】米国南北戦争の時に当り、北部のウエストポイント、南部のヴァージニア、此の両兵学校は共に幾多の名将勇卒を輩出せり。此篇の原作者は当時南部の兵学校に在りて砲煙鉛雨の間に立つたるの一人なり。記す處詳ならずと雖とも、亦以て当時紅顔の青年輩が慨然銃を執て軍に従ふ情況の其一班を知るに足らん。 125頁

読んでわかるようにこの文章は蘆花による作品全体の解説だ。原作のようにいきなりバージニア州レキシントンなど書きはじめても日本の読者には理解がむづかしいという考えだろう。原作者が南部のバージニア士官学校在学中に実戦に参加したと記述する。原作者について蘆花は書いていないが上述のとおりジョン・S・ワイズである。

喋血生も蘆花と同じく「前言」をつけた。しかしそのまま漢訳しているわけではない。

【喋血生】少年軍何為而起哉。我同胞亦曾讀美国一斤[片]南北戦争之歴史乎。紀元千八百六十一年。卒以黒奴問題。啓南北戦争之大劇。丁斯時也。戦雲惨淡。戦血淋漓中。而忽現一種不可描写之光彩者。華華少年軍一隊是也。此篇乃当時南部兵学校之生徒。砲煙彈雨中之一少年之従軍日記耳。記少年軍之歴史。僅得其鳳毛麟角。雖然讀之令我之精神油然勃然。飛舞不止也。乃述其口吻。以正告我同胞少年。 1頁

少年軍はなんのために始まったのか。我

が同胞はアメリカ南北戦争の歴史を読んだことがあるだろうか。1861年、黒人奴隷問題によって南北戦争のドラマがはじまった。その時、戦雲が立ちこめ戦血が滴り流れる中に描写のできないほどに輝く者たちが突然現われた。あでやかな少年軍の一隊である。本篇は当時の南部兵学校の生徒で砲煙弾雨の中にいた少年の従軍日記である。少年軍の歴史を記述して得がたい。これを読んで私の精神はさかんにたぎり舞い止まないのだ。そこでその話しぶりを記して我が同胞の少年に向けて厳肅に告げようと思う。

喋血生の文章はわずかに蘆花の「此篇の原作者は当時南部の兵学校に在りて砲煙鉛雨の間に立つたるの一人なり」にもとづいて膨らませたものだ。1861年と黒人奴隷問題を補足して清末の読者に説明したのはよい。しかし普通の漢訳者であれば蘆花の「前言」をそのまま使用するだろう。南北戦争の南軍に立った視点で物語が語られると明白に理解できるからだ。ところが喋血生は最初からその考えがない。少年軍に焦点を当てた独自の説明をした。

蘆花の文章がはじまる部分を原作と照合する。

【原作】 In the autumn of 1862 the writer, then a lad under the regulation age of sixteen, but admitted as a special favor, reported as a cadet to the superintendent of the Institute. It was almost the only scholl then open in the State. p.461

1862年の秋、筆者は当時既定の16歳に満たない少年だったが特別な好意で入学を許可され士官候補生として学校管理者に報告された。当時、州内で開校している学校はほとんどここだけだった。

【蘆花】 千八百六十二年の秋、記者は猶未だ十六歳の定齡に達せざる少年なりしが、特別を以て名をヴァージニア兵学校生徒の簿

籍に上すを得たり。時は正に戦雲悒悒の日、
125頁

蘆花はほぼ原作どおりだ。「士官候補生 cadet」と大文字の「学校 Institute」だから当然「ヴァージニア兵学校生徒」という蘆花の日本語訳になる。「時は正に戦雲悒悒（静かに震動する）の日」は蘆花の加筆。

喋血生は蘆花の書き出し部分を次のように漢訳した。

【喋血生】 嗚呼。我少年其諦聽。其大声喝采!!!喝采!!!/時惟千八百六十二年之秋。余年十有五。秋風瑟瑟。鬼氣嚶嚶。過威尼巫大大学校。 1頁

ああ、我が少年よ、よく聞きたまえ。大声で喝采せよ！喝采だ！/時は1862年の秋、私は15歳だった。秋風が吹きわたり邪悪な空気がざわめく中にヴァージニア大大学校で過ごした。

蘆花の「時は正に戦雲悒悒の日」を喋血生は「秋風瑟瑟。鬼氣嚶嚶」と対句風に置き換えた。それと「ヴァージニア大大学校」以外は喋血生の作文である。少年に呼びかける部分を加筆した。そこから喋血生が蘆花の文章を忠実に漢訳しようとはしていないことがわかる。蘆花の文章を削除しながら部分的に飾って作文する傾向がある。特に人名を多く漢訳しなかった。採用したのは蘆花の約4割にすぎない（蘆花が日訳したのは約7割）。外国人の名前をいちいち漢訳するのは清末の読者には煩わしいという判断だろう。蘆花を利用して喋血生独自の記述を行なうのが彼の基本的なやり方だ。

1863-64年、北軍からの攻撃に疲労困憊意気消沈した南軍だ。その中で1ヵ所だけ元気旺盛な場所があった。バーヂニア士官学校である。

【原作】 But in one spot of the Confederacy,

at least, the martial spirit still burned high, and the hope of battle flamed fresh as on the morning of Manassas. One little nest of fledglings yet remained, who, all untried, too young to reason, too buoyant to doubt, were longing to try their wings. p.464

しかし、少なくとも連合国の一箇所では尚武の精神はまだ高く燃え、戦いの希望はマナサス（バージニア州）の朝のように新鮮に燃え上がっていた。まだひとつの小さな巣が残っており、彼らは皆経験がなく論理的に考えるには若すぎ、疑うにはあまりにも楽天的で、自分の翼を試すことを切望していた。

【蘆花】此時に当て南部十余州唯一点の戦心勃勃として燃ゆるあり、唯一巢の其翼を試みんと欲して已まざるの雛鷹あり、ヴァージニア兵学紅顔青年の一隊是なり。 128頁

蘆花訳は原作の骨子を押しさえたものだ。原文にはない「ヴァージニア兵学」は蘆花が補った。読者にはこの方がわかりやすい。

喋血生はこの部分をしっかりとつかむ。装飾して強調する。

【喋血生】而十余州中有一点戦心勃勃加燃如沸者。僅一巢之雛鷹。其翼躍躍。僅一穴之乳虎。其声嗚嗚。少年軍哉。少年軍哉。積一身之雄心奇憤。忍之無可忍。鬱之無可鬱。 3頁

そうして10余州のうち戦う気持ちが旺盛で沸きあがるように燃えているところが1ヵ所ある。ひとつの巣の雛鷹だけがその翼を羽ばたかせ、ひとつの穴の幼い虎だけがその声をあげていた。少年軍である。少年軍である。身体中の意気込みと驚くほどの怒りをためて忍び難きを忍び抑えがたきを抑えていた。

「躍躍」に「嗚嗚」、「忍之」に「鬱之」と対句風にしなくては気がすまない。知識人としての習性だろう。また鷹だけでは平衡しないから虎を追加した。ここは梁啓超「少年中国説」（『清議報』第35冊 1900.2.10）の「幼い虎が谷で吠えれば百獣は恐れおののき、鷹と隼が羽ばたこうとすれば風塵がまいあがる〔乳虎嘯谷。百獣震惶。鷹隼試翼。風塵吸張〕」という語句にもとづいている。梁啓超は「少年中国」と「中国少年」には未来が広がっていると主張する。その「少年中国」精神が喋血生漢訳の根底にあることは明白だ。3篇の別原作をまとめて「少年軍」と統一した漢訳題名にしたのもそれを背景にしているからだ。

「ヴァージニア兵学」は省いた。そのかわり「少年軍」を繰り返す。喋血生はこの少年軍を特に持ち出して読者に印象づけたかった。自分の考えをここぞとばかりに突出させたのだ。

喋血生が文章を飾りたてたがる例をもうひとつ示す。出撃命令が下されたあとの情景だ。

【原作】Not a sound was uttered, not a man moved from the military posture of “parade rest.” Our beating hearts told us that our hour had come at last. pp.454-465

音もなく、ひとりも「整列休め」の姿勢から動かなかつた。鼓動する心臓がついに我々の時が来たことを告げていた。

【蘆花】一声の音も聞へず、一個の人も動かさず、波の如く乱れ拍つ心臓は我儕の時遂に至れるを報道せり。 129頁

蘆花の日訳はほぼ原作に近い。静かに興奮する少年たちの状況が書かれている。ここを喋血生は大いに盛りあげる。

【喋血生】余当時之心臓。余当時之情形。雖挙数千百之詞章家。不足以形容之。余又喜。余又驚。余之心如波之湧。忽上忽下。

余之顔如潮之流。忽冷忽熱。余不自知其何以然。余不自知其何以然。副長官一番和淚和血之宣告畢。忽裂帛一声。同出于口曰。男兒!!!男兒。願為祖國所盡。 4頁

私の当時の心臓、私の当時の状態について数千の文章家をあげたとしてもそれを描写することはできない。私は喜び驚いた。私の心は波が湧きあがるように突然上下し、私の顔は潮の流れのように突然冷たく熱くなった。私はそれがどうしてなのか自分ではわからなかった。私はそれがどうしてなのか自分ではわからなかった。副長官は涙と血で宣告しおわると裂帛の声で叫んだ。「少年よ！少年よ。祖國のために尽してくれ」

力がいった文章になるとどうしても対句風になるらしい。蘆花の文章が静かな緊張感を描写しているのに比較すると喋血生は熱情がありすぎる。こういう場面では抑える表現の方がかえって感動を呼び起こすと気づいていない。とにかく大げさに大声でガンバレというのでは読者の気持ちを冷めさせる。漢訳としてはうまくない。だから独自に改変した翻案であるという。女学校が集まるスタントンを通過したときだ。喋血生は蘆花にはない場面を追加する。女学生が少年軍に言葉を投げかけた。

【喋血生】「諸君此去。其塵戰喋血。果本分也。雖然。甘死不如義死。義死不如視死如歸。諸君乎。其擐旗而歸來。否則乘楯而歸來」 4頁

「みなさんがこれから行って激戦の中で血の海を踏むのですがそれが本分なのです。とはいえ仕方なく死ぬよりも正義のために死ぬ方がよい。正義のために死ぬよりも死をまったく恐れない方がいいのです。みなさん、旗を奪って帰ってくるか、そうでなければ楯に乗って帰ってきなさい」

文中に「喋血」が使われている。本篇は漢訳者不記だ。これ以降に筆名「喋血生」を使用するのはここに由来するだろう。

生きて帰ってこいという励ましの言葉ではない。負けたら死ぬという恐ろしい呼びかけなのだ。「盾を持って帰るか、盾に乗って帰れ」というスパルタの格言を流用したとわかる。アメリカの少年軍にスパルタを押しつけて不自然になるのを喋血生は厭わなかった。精神が高揚している。前のめりの姿勢が明確だ。蘆花からかなり離れた。掲載誌『浙江潮』の編集者は煽りたてる論調を許容する方向に傾いている。のちに魯迅「斯巴達之魂」を連載したところからも推測できる。

ニューマーケットでの戦闘において原作者ワイズは荷馬車を担当していた(輜重兵)。しかし戦闘で発砲もせずに帰ることは父親から侮蔑を受けることになる。その部分を引用する。

【原作】But I have an enemy in my rear as dreadful as any before us. If I return home and tell my father that I was on the baggage guard when my comrades were fighting, I know my fate. He will kill me with worse than bullets—ridicule. p.467

しかし私の背後には前の者と同じくらい恐ろしい敵がいる。もし私が家に帰り父親に同志が戦っている時私が荷物番をしていたと言え、私の運命は明らかだ。父は弾丸よりもひどい嘲笑で私を殺すだろう。

【蘆花】余ガ後ニハ敵ヨリモ猶恐ルベキ敵アリ。家ニ帰ツテ、我一発ヲ放タズ、輜重ノ車ヲ護リシト云ハバ、我父ハ嘲弄ノ矢ヲ以テ我ヲ射殺サン。弾丸ノ死ハ猶易シ。名誉ノ死亡ハ忍ブ可カラス。 133-134頁

原作は淡々と事実を述べる。蘆花の前半文章は原作と基本的に一致している。しかし弾丸、

名誉などの後半部分は蘆花の加筆だ。喋血生の漢訳を見る。

【喋血生】吾儕所怨者。不在我之前。而在我之背。今既乘輿而來。苟昂葳七尺軀。不与敵人一相接。吾歸去。吾同胞將以嘲笑之。矢殺我。彈丸之死易。名譽之死不可忍。 6頁

我らが怨むものは我らの前にいるのではなく背後にいるのだ。今興に乗ってやって来たが、もしもこの意気軒高で立派な男が敵と接触せずに帰ったとしたらどうなる。我が同胞は嘲笑という矢で私を殺すだろう。弾丸で死ぬのはたやすいが名誉が死ぬのは耐えがたい。

原作と蘆花が示す父親と喋血生の同胞とは違う。それを除けばこの個所の喋血生漢訳は蘆花とほぼ一致する。すなわち喋血生は直訳しようと考えればできる力量を有している。それを意図的にやらないだけだ。ややもすれば加筆し自己の考えを主張することを指している。

原作者は嘲笑されることが嫌で仲間3人と突撃した。彼も負傷する。後に捕虜になった北軍ドイツ人が語った。士官候補生の隊旗である白旗を指しての告白だ。ここはドイツ語訛りの英語で話している。原作の生々しい個所である。

【原作】“Dem lectle tevils mit der white vlag vas doo mutch fur us. Dey shoost smash mine head, ven I vos cry ‘Zurrender’ all der dime.” p.470

あの白い旗を持つ悪魔は私たちを非常に苦しめた。彼らは私の頭を砕き私はずっと「降参」と叫び続けた。

【蘆花】『白旗立てたる小魔ばかりは如何にも我等の手に合はず降参降参と幾度呼ばはりても構はず頭を撃たるゝには大に弱りし』 138頁

「lectle tevils」は「little devils」である。ドイツ語で訛っているから一見して把握しにくい文章だ。それを蘆花はうまく翻訳している。

【喋血生】「何處小魔兒。白旗豎處。竟令乃公手足箝制而無所措」 9頁

「小悪魔のいるところには白旗が立っていて、俺の手足を押さえつけて処置のしようがなかった」

喋血生は蘆花の前半分を漢訳しただけ。

結 末

少年軍は勝利してその後長い年月が経過した。歳をとり死去するものもいる。母校を思つて物語の末尾は次のように結ばれる。

【原作】The Virginia Military Institute still survives the wreck of war. But it is not the hotbed of war that it was in those days. p.471

バージニア士官学校は今でも戦争の残骸を残している。しかし当時のような戦争の温床にはなっていない。

【蘆花】たゞヴァージニア兵学校は猶今日に存すと雖とも、今は戦争の種蒔く床にはあらざるなり。 141頁

【喋血生】惟余学校之校旗仍飄飄。于夕陽影裏。迄于今未有異。而少年軍三字。則刻入世界上不雕之木之腦影中。于今未曾忘。 10頁

ただ我らが学校の旗はやはりたなびき夕陽の中に今でも変わりはない。そうして少年軍の3字は世界中の彫りつけることのできない腐木のような脳裏にも刻み込まれ、今にいたるまで忘れられてはいない。

原作と蘆花訳は若くして参戦しなければなら

なかった少年軍の哀愁悲哀をただよわせて終わる。しかし喋血生漢訳には哀愁感はすこしもない。ただ少年軍を強調したかった。

喋血生が『浙江潮』初版と再版につけた附言から抽出する。

初版には「訳者乃曰」とある。再版では「訳者又曰」に変える。ふたつの内容は同一。喋血生は中国人の性質が理解できないと述べる。中国人は自然災害、強盗、疫病で死ぬことを恐れない。しかし戦争となる意気消沈して戦死は恐ろしいという。甲午之役（日清戦争）では数十万が死に、庚子之役（北清事変、義和団事件）で数十万が死んでいるではないか。どうして中国人は戦死を恐れるのか。戦死を恐れると父母家庭妻子、国を失うことになる。喋血生は戦死を恐れるなど言い切る。

再版で追加した「訳者乃曰」ではより具体的に提案している。喋血生は蘆花の作品を狂喜酔心して漢訳した。そうして到達した考えは「支那少年軍」という5字の旗を打ち立てなければならぬということだ。喋血生は蘆花日訳を利用して少年軍を過度に称賛し自分の考えであるその必要性を強引に主張した。その姿勢が内容の異なる連続漢訳「少年軍」の二、三に継続される。 罫

【注】

- 1) 竇新光「附録：明治小説の中国語韓国語の翻訳・翻案作品目録（1895-1919）」『日中韓近代初期文学の関連様相研究——明治小説の伝播と受容を中心に』神戸大学博士論文2019.3.25 電字版/2021.3.25公開。【竇19-077】

少年軍（一）固有名詞対照表

JOHN S. WISE	蘆 花	喋血生
Virginia	ヴァージニア	威尼亞
William	ウイリアム	威廉
Washington	ウワシントン	×
Davis	デヴィス	×
the seed corn of the Confederacy	南党の種子	南党之種子
General Smith	スミス少将	×
Colonel Gilham	佐官ギルハム	×
Colonel Williamson	佐官ウイリアムソン	×
Colonel Preston	佐官プレストン	×
Colonel Crutchfield	佐官クロツチフヒールド	×
Stonewall Jackson	ストーンウォール、ジャクソン	祈約聖
Cutshaw	コツショー	確西玉
Preston	プレストン少佐	少佐匍雷頓
Hardin	ハーデーイン	画豆英
Colonel Marshall McDonald	マクドナルド少佐	麦独那德
Sharpsburg	シャープスベルグ	×
Fredericksburg	フレデリツキベルグ	×
Chancellorsville	×	×
Gettysburg	ゲツテイスベルグ	×
Vicksburg	ヴァイツクスベルグ	×
Chickamauga	×	×
Missionary Ridge	ミシヨナリーリツチ	×
Paxton	パツクストン師	×
Davidson	デヴツドソン	×
Lee	李意將軍	×

Grant	グラント	×
Sherman	シヨルマン	×
Sheridan	セリダン	×
Stoneman	ストーンマン	×
Wilson	ウイルソン	×
Kautz	×	×
Averell	×	×
Hunter	×	×
Burbridge	×	×
Blue Ridge	ブルーリッジ	×
House Mountain	×	×
Lexington	×	×
Breckinridge	ブレッキンリッジ	×
Staunton	スタントン	斯丹頓
Sigel	シーゲル	西偉
Woodstock	ウードストック	×
Harrisonburg	ゾンベルグ	×
Lacy's Springs	レーシー、スプリング	×
New Market	ニュー、マーケット/ニューマアケツト	×
Captain Frank Preston	プレストン佐官	蒲婁斯頓
Breckinridge	ブレッキンリッジ	勃克林
Echols	エコール	由確盧
Wharton	ホールトン	僕盧頓
Shenandoah Valley	セナドアの谷	×
Luray	×	×
Massanutten	×	×
McLaughlin	×	×
Redwood	×	×
Stanard	スタナルド	×
Woodlief	×	×
Petersburg	ピートルスボルグ	×
“Baldy” Smith	×	×
Napoleon	一世那翁	拿破崙
Patton	×	×
Woodbridge	ウードブリッジ	×
Evans	イヴァンズ	×
Cabell	ゲーベル/士官ケーブル	士官克蒲/克勃盧
Captain Hill	士官ヒル	希盧
Read	×	×
Merritt	×	×
Charley Faulkner	チャーリー、フオクノル	×
Crockett	クロツケツト	柯洛克篤
Jones	ジョンス	謝郁斯
McDowell	マクドウエル	馬科読哀盧/儒柯独由児
Atwill	×	×
Jefferson	×	×
Wheelwright	×	×
Shriver	×	×
Evans	イヴァンス	衣維安治
Stanard	スタナルド	之撻納

Edgar	エドガー	×
Pizzini	ピツジニー	俾奇尼
Preston	プレストン佐官	蒲婁斯頓
Collona	士官コロナ	×
Henry A. Wise	ヘンリー、エー、ウアイズ	×
Mount Jackson	×	×
Rude's Hill	×	×
Manassas	×	×
Washington	×	×
North Carolinian	×	×
Harrisonburg	ハリソンベルク	×
Charlottesville	×	×
Richmond	リッチモンド	利西孟篤

蘆花訳「王の紛失」の漢訳2種

——羅普、喋血生

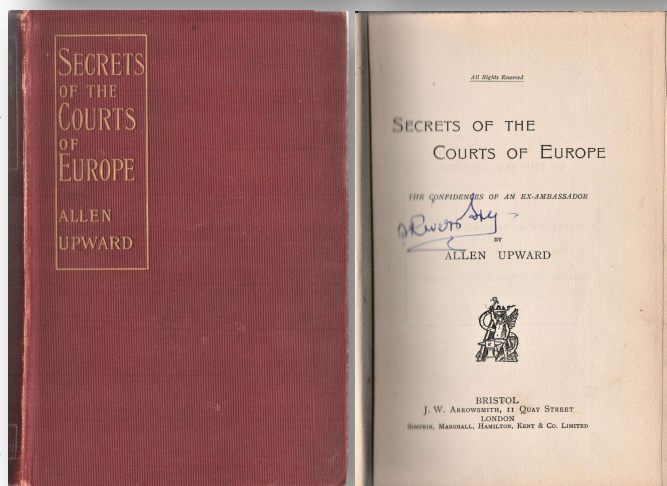
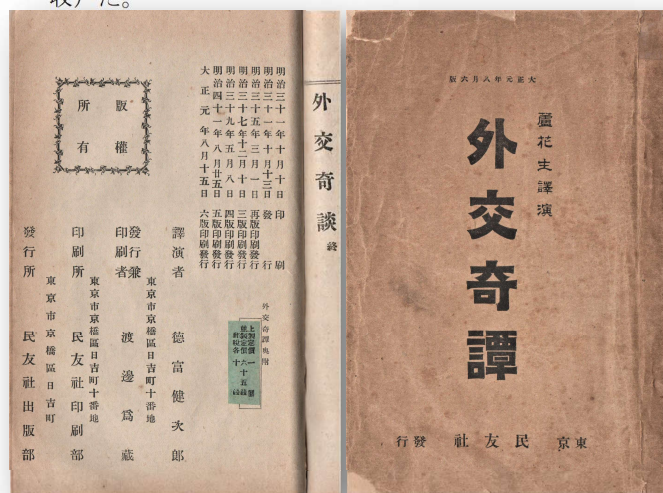
沢本香子

日訳にもとづく漢訳2種

徳富蘆花訳述「王の紛失」(『国民新聞』1898.4.5-15。未見)がある。蘆花は該作を含めて全12話を翻訳した。主として『国民新聞』に掲載したのちに『外交奇譚』(民友社1898.10.13/1908.8.25五版。写真は六版)と題する1冊にまとめた。

蘆花は『外交奇譚』の「例言」において「原書は“Secrets of the Courts of Europe”-Allen Upward.」と明記する。すなわちアレン・アップワード(ALLEN UPWARD、1863-1926)『ヨーロッパ朝廷の内幕話[SECRETS OF THE COURTS OF EUROPE: THE CONFIDENCES

OF AN EX-AMBASSADOR]』 BRISTOL: J. W. ARROWSMITH, 1897。初出は“PEARSON'S MAGAZINE”1896.1-12連載。hathi trust 所収)だ。



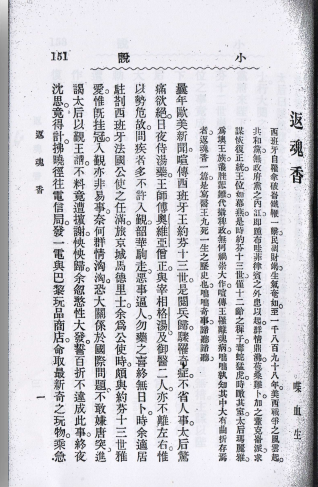
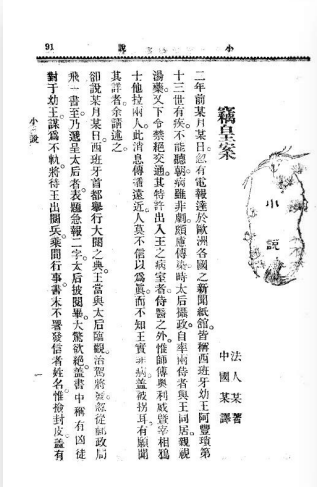
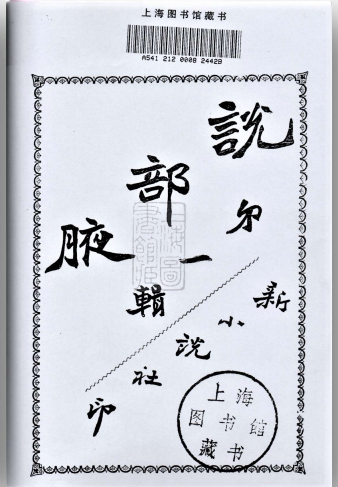
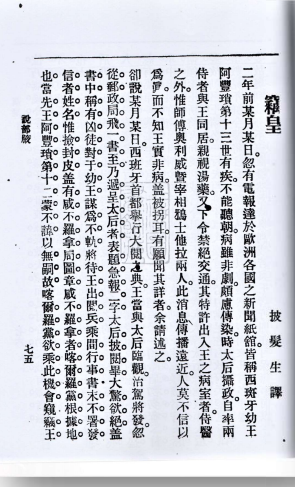
蘆花訳「王の紛失」は該書に収録された「盗まれた王 [A STOLEN KING]」を原作とする。

その「王の紛失」をふたりの中国人がほとんど同時期に漢訳した。日訳1種から出現した漢訳2種だ。

先行研究によって「王の紛失」を漢訳した2種は次のとおりだと判明している(中村忠行、渡辺浩司などの研究は樽目録の注釈欄を参照のこと)。便宜的に数字を振る。

1 法人某著、中国某訳「竊皇案」『新民叢報』第33-34号 光緒二十九年五月十四日・二十九日 (1903.6.9-6.24)

2 喋血生「返魂香」『浙江潮』第8期 光緒二十九年八月二十日 (1903.10.10)



1は原作者を法人某とする。フランス人だ。しかし蘆花が示しているのはアップワードである。漢訳者にはアップワードがイギリス人だという知識がなかったらしい。原作と同じく蘆花日訳に登場する主人公はフランス人という設定だ。漢訳者はそこから原作者をフランス人にしてしまった。

中国某訳「竊皇案」はのちに新民叢報社員編輯『説部腋』(新小説社 光緒三十一年十月廿五日(1905.11.21)。上海図書館所蔵)に収録される。

その際、披髮生訳と示し題名が「竊皇」に変更

された(以後は「竊皇」)。披髮生は羅普の筆名だ。漢訳の字句は一致するから先の中国某とは羅普(孝高)だと断定することができる。

同様の例はもうひとつある。法国某著、中国某訳「外交家之狼狽」(『新民叢報』掲載)が披髮生訳「俾斯麦之狼狽」(『説部腋』所収)だ。この中国某も羅普を意味する。

また別の法国某著、披髮生訳「(外交小説)白絲線記」(『新小説』掲載)は最初から筆名を出している。それがそのまま披髮生訳で題名だけを変えて「白絲線」(『説部腋』所収)である。

以上はいずれもアップワード原作(以後は原作)を蘆花が翻訳した上述『外交奇譚』に収録されている。羅普は原作者がフランス人だとい

う誤りからどうしても抜け出すことができなかつた。

『新民叢報』と『浙江潮』はともに日本で刊行されていた中国人向けの漢語雑誌である。漢訳者はお互いに同一底本を使用していることを知らなかった。結果として漢訳が重複して公表された。清末では珍しくない。

羅普は広東の人。早稲田専門学校（のちの早稲田大学）に留学した。彼は梁啓超、麦孟華らが主宰する『清議報』『新民叢報』の編集に参加している*1。ヴェルヌ著、森田思軒訳『十五少年』を飲冰子（梁啓超）と披髮生（羅普）が合訳して『十五小豪傑』となったのは周知のことだろう。

2の喋血生「返魂香」には原作者の記載がない。また「訳」も表示しない。それが喋血生のやり方だった（陳清茹、李艷麗、国蕊、梁艷らによる関連研究についても樽目録注釈を見られたい）。

ひとつの記録を引用しておく。喋血生と同時代人の徐兆璋が「返魂香」について次のように書いている（記号はママ）。

《新小説》所訳者名《竊皇案》，叙述大同小異（後略）。430頁*2

徐は『新民叢報』であるべきところを『新小説』と勘違いした。それは置いておいて「返魂香」の内容が「竊皇案」と大同小異だという指摘は当たっている。それもそのはずだ。漢訳の底本が蘆花「王の紛失」なのである。大同小異と表記して同一だとは書いていない。両者の結末が違ふところを認識したうえで正確に説明している。

昔ならばそれを見て喋血生と中国某が同一人物だと推測する研究者がいたかもしれない。しかし中国某が羅普であることは早くから指摘されていたためそこを誤る人はいない。

喋血生も日本で刊行された『浙江潮』に漢訳

を掲載している。当時、日本に在住していたと思われる。詳細は不明。

蘆花日訳を羅普と喋血生がどのように漢訳したのか。本稿において検討する。

蘆花訳

蘆花訳『外交奇譚』にはひとりの語り手がいる。主人公といってもいい。ヨーロッパ列国の朝廷で20年来フランス特命全権大使を務めたことのある老人だ。原作において太后から「男爵 M. le Baron」（p.20）と呼びかけられている。彼が物語るヨーロッパ朝廷の内幕話全12話である。蘆花は原作の基本構造はしっかりと把握する。ただし逐語訳というわけではない。ちいさな部分に改変がある。

原作と蘆花日訳の違いを最初に指摘しておく。

原作は「盗まれた王」を冒頭に置く。そこで全書の構成が元大使（以後は大使）の語りで成立していることが示されるのだ。

【原作】“IT is a pity,” remarked the Ambassador to me, as we sat sipping his Excellency's very choice cognac after dinner, “that there is no one who can write the secret history of Europe for the last twenty or thirty years.” p.9

「とても残念なことだよ」と大使は私に言った。夕食後、私たちが大使の特選コニャックを飲みながらのことだ。「この20年あるいは30年のヨーロッパ秘史を書ける人がいないのだからね」

蘆花はこの冒頭部分を抜き出して日訳全体の前書きとした。なぜなら原作の順序を入れ替えて「王の紛失」は『外交奇譚』の第5話に置いたからだ。あるいは新聞掲載後に単行本化する予定があり最初から抽出するつもりだったのかもしれない。単行本の導入部とした。

前書きの冒頭はつぎのとおり。一部を略す

(引用はルビ、傍線省略、一部のくり返し記号は文字にもどす。固有名詞は必要に応じて蘆花訳を使用。以下同じ)。

【蘆花】「僕は実に左様思ふです、此二三十年來の歐洲外交内幕史を書いたら如何様に面白からふ」／場所は仏京巴里。斯く云ひたるは、何某とて、二十年來歐洲列國の朝廷に全權大使を務め、各國朝廷の内幕、外交懸引の魂胆、一として知らざる所なき外交社會の老武者なり。 5頁

「イヤあるともあるとも。つい先年の事だが、ビスマルクの老爺め普仏戦争の原因とも云ふ可き一通の電報を公にしたが、世間では二十年間毫も其れと知らなかつたぢやないか。(後略)」 5頁

蘆花は原作の内容を把握したうえで部分的ではあるが自由に書き換え移動した。上半分の「場所は……」からの個所は独自に書き加えた説明になっている。

また同じく「ビスマルク[Prince von Bismarck]の秘密電報 [the secret of his telegram]」(p.9)についても原作「盗まれた王」から抜いて上のおり前書きに加えた。ゆえに蘆花「王の紛失」にはその個所がない。

大使の経験談を書き留めて『外交奇譚』が成立したという説明も加筆して盛り込んでいる。

【蘆花】斯く聞きてより、余は最近二十年間の活ける外交史、奇譚の庫とも云ふ可き此人にいよいよ親しみ寄り、書齋に、旗亭に、劇場の幕間、街上の散歩、機ある毎に務めて其経歴談を聞き出すを楽しみたり。聞いて書き、書いて蔵め、積むで十有二篇をなしぬ。下に列挙する所は此なり。 6頁

「余」とは大使の話を書き書きた氏名年齢ともに不詳の男性だ。原作では大使から「友よ

My friend」(p.18)などと呼ばれる。以上は蘆花による独自の説明である。原作には存在しない。読者の理解を助けるために物語の成立過程を書き加えた。

蘆花「王の紛失」

蘆花日訳と原作との相違点を続けて見る。上述のように単行本に収録したとき導入部分となる前言を設けた。また全12話すべての冒頭に解説文を追加したのが原作と異なる点だ。

「王の紛失」では原作にはない8章に分けた。また補った解説文は次のとおり。

【蘆花】過般米國との戦争によりていよいよ其僊羸(はいるい)を示したる西班牙の國王アルフォンソ十三世は当年十二の童なり。太后マリア、クリスチアナは奥國皇家の女、摂政として賢明の聞あり。／西班牙の國、民弊れ財乏しく、外にキューバ諸方の煩累あり、内に共和黨無政府黨紛起し、恟々たる人心あり。加ふるにドンカルロスありて自から正統の王を以て期し、其一派は常に變に乗ぜむとす。実に王位の動揺旦夕を必し難きものあり。此内外多難に際して摂政の任に當る太后の苦心蓋し言ふ可からざるものあらむ。／一篇の物語、此事情を知つて、然る後に読む可し。 117頁

蘆花は政治背景を上のように説明する。「僊羸」は前後を入れ替えても同じ。疲労困憊すること。スペイン国内の政治情勢が不安定であることをあらかじめ述べた。そこは、いい。しかし原作にはない年代を書き加えた。米西(アメリカ・スペイン)戦争はキューバをめぐる起こった。1898年のことだ。年代を原作にはない1898年に定めた。ゆえに少しの不具合が生じている。つまりそこからアルフォンソ13世(1886-1941)の年齢は自然と12歳になる。ところが原作は次のとおり。「王自身は、いうま

でもなく7歳の少年だから…… [The King himself, it is needless to say of a boy of seven ……] (p.15)

7歳と12歳では異なる。米西戦争と関係づけるために蘆花は幼王の年齢を原作にはない12歳にした。自説を通すために原作の記述を無視したことになる。そこが不具合だ。

蘆花は「太后マリア、クリスチアナ」とする。一般にはマリア・クリスティーナ王太后だ。原作では the Queen-Regent (摂政女王)、the Queen、Her Majesty、Queen Christina と示している。

この幼王が誘拐されたというのが物語の骨子である。幼王殺害を予告する手紙が来た。予定していた観兵式には太后と皇女が出席し安全のため幼王は宮内内に留めた。しばらくして少将エスピノサがやって来て太后の御命令だと幼王の御出席を求めた。そうして幼王は出て行ったまま行方不明となった。あとで身代金要求の手紙が来て誘拐事件だと発覚した。誘拐の事実は伏せられ病気だと公表する。その場に居合わせた大使が探偵顔負けの活躍をして宮中において幼王を発見するというのが粗筋だ。

この物語の注目点を指摘しておく。幼王が宮中を出たというのが最重要点である。語り手の大使がその計略をめぐる謎を解明する。探偵小説あるいは推理小説の部類にはいる。

蘆花はほぼ原作のとおり翻訳している。「ほぼ」というのはくり返すが逐語訳ではないという意味だ。大筋を把握しながらある個所では省略して書いていると言い直してもいい。

上の少将エスピノサが登場した個所で大使の言葉が途切れた。原作ではすかさず聞き手が口をはさむ。

【原作】“Excuse me, but was there a General Espinosa in the Spanish army?”

“There was; but he was at this time stationed in Barcelona. Command your

impatience till the end, and you shall hear everything.” p.14

「失礼ですが、スペイン軍にエスピノサ少将はいたのですか？」

「いたのだよ。しかしその時はバルセロナに駐在しておった。最後まで辛抱しなさんか。そうすればすべてを聞くことができますぞ」

大使から話を聞く人物があることを蘆花は前書きにおいて説明している。その人が時々出現するのは日本語訳では適当でないと考えたようだ。上のような個所も省略することができるかと判断したからそうした。本篇ではこれ以後も同様の処置を行なっている。小さな部分だ。物語の本筋には影響がない。ただし蘆花の翻訳姿勢を知るためには理解しやすい部分である。

羅普漢訳「竊皇」と喋血生「返魂香」

羅普の「竊皇」は王窃盗を意味する。王が誘拐されたことを示す。蘆花「王の紛失」をそのまま漢訳した。一方の喋血生がつけた「返魂香」とは中国伝説の香である。焚くと失われた者の姿が出現する。失われた王をあぶりだす主人公に懸けた題名だろう。原題、蘆花日訳と比較して探偵小説の篇目としてはひねり過ぎた感がある。

羅普は蘆花による冒頭の解説文は省略した。ほかの作品についても同様に省いている。そういう方針だったらしい。

もうひとりの喋血生は該当部分を漢訳した。次に示す。

【喋血生】西班牙自羅拿破崙鉄鞭一撃。民凋財竭。生氣奄如。至一千八百九十八年。美西戦争之風雲起。共和党。無政府党之内訐。即踵布哇菲律賓之外患以起。群情鼎沸。苞桑難卜。加之董克崙派。求謀恢復正統。王位如慕燕。是時約芬十三世。僅十二齡之

穉子。毒蛇猛虎。時瞰其室。太后瑪麗雅。為墮王族。叢脞艱難。代撰稗政。無何禍崇[崇]大作。喧伝王罹離魂病。咄咄孰知其中大有曲折存焉者。返魂香一篇。是写医王九死一生之歴史也。咄咄奇事。諦聴諦聴。 1 頁

スペインはナポレオンによる鉄鞭の一撃をこうむってより国民は疲弊し財政は枯渇し息も絶え絶えだった。1898年にアメリカ・スペイン戦争が起きると共和党と無政府党の内紛に踵を接してハワイ、フィリピンの外患が発生すると大衆の感情は沸騰し国家の安泰は見通すことがむつかしかった。さらにドンカルロス派は正統を回復し王位を望んでいた。その時アルフォンソ13世はわずかに12歳の童子である。毒蛇猛虎がその王室を狙っていたから太后マリアはオーストリア王族として摂政の任に当たり細々しい艱難に対して大事がないようにしたのだ。幼王が夢遊病にかかったと喧伝したのは、さてどんなこみいった事情があるのだろうか。「返魂香」の1篇は九死に一生の王を救う経緯を書いたものだ。とても奇妙な事である。よくお聞きください。

以上を見れば喋血生は蘆花の解説をよく読みこなしているということが出来る。内容を理解し配置を入れ替え、さらにはフィリピンなどの単語を追加した。ただし内容を先取りして幼王の病気を夢遊病(離魂病)としたのは解説のしすぎだ。蘆花の翻訳でも病名など書かれてはいない。また、ハワイ(布哇)ではなく蘆花の書く「キューバ」すなわちキューバ(漢語は古巴)の方がより適切だった。「アルフォンソ」を「約芬」としたのは許容範囲内だろう。

一部の齟齬はあるにしてもこの個所は正しい漢訳になっていることは事実だ。喋血生は確かな知識を持っていた。「この個所は」と書いた理由はほかの場所では不具合が多いからである

(後述)。今更ながらつけ加えれば解説部分を翻訳しているところから喋血生漢訳の底本が蘆花訳の単行本であることが確認できる。ただし喋血生は「訳」と書かない。

蘆花訳の冒頭部分に該当する原文を引用する。

【原作】“It was about two years ago, as you will recollect, that the press of Europe was filled with reports of a mysterious illness from which this young monarch was said to be suffering. This malady was described as being of a highly infectious character, though not exactly dangerous. At the same time the world was called upon to admire the maternal solicitude of the Queen-Regent, who, it was said, in order to nurse her son, had shut herself up in his apartments, with only two attendants, refraining from all intercourse with the rest of the Palace while the critical period lasted. The only other persons who were permitted to have access to the sick-room, besides the physician in attendance, were Father Oliva, the King's tutor, and Senor Guastala, at that time Prime Minister of Spain. / “In the meantime, what had really happened was this: pp.11-12

「2年ほど前、ヨーロッパの新聞はその若い君主が不思議な病気にかかったという報道で埋め尽くされたのをご記憶かな。その病気は危険というわけではないが非常に感染力が強いとされていた。同時に社会は摂政王妃の母性的な配慮に感嘆した。彼女は息子を看護するためにたったふたりの付添人を連れて自室に閉じこもり、危篤状態が続く間は宮殿の他の場所との交わりを一切控えたという。病室に入ることが許されたのは付き添いの医師の他には、王の家庭

教師のオリヴィア神父と当時スペイン首相のグアスタラ氏だけだった。／「その間に本当は次のようなことが起こっていたのだよ。

【蘆花】「二年前、欧洲列国の新聞は筆を揃へて西班牙幼王アルフォンソ十三世病気の由を伝へぬ。病気は劇症ならざるも、頗る伝染の恐れあるものとの事なりし。当時摂政太后が、一切宮中の交通を絶ち、附添の者二名と幼王の部屋に閉ぢ籠りて看護に従事せられたる其情愛の深きは到る處談柄【柄】となりたり。王の病氣中、病室に出入を許されたる者は、侍医の外には王の師傅オリヴァ僧正と当時の宰相ガスタラ氏のみなりき。／此れ世間の遍ねく聞きて信ぜし所なり。然れど其王は病めるにあらず。アルフォンソ十三世は拐奪（かどわか）し去られしなりき。／いざ其顛末を物語らむ。聞きたまへ。 118頁

蘆花は「若い君主 [young monarch]」をそのまま訳さずに「幼王アルフォンソ十三世」と言い換えた。すでに解説文で名前を出している。くり返した形になったのは新聞初出をそのまま使用したからだろう。蘆花の訳した「師傅」は原作では「家庭教師 tutor」である。また原作を無視して幼王誘拐事件を前もって聞き手（読者）に語ってしまった。

見てのとおり蘆花は原作を逐語訳したわけではない。要点を押さえて簡潔にまとめている。

羅普漢訳から検討する。

【羅普】二年前某月某日。忽有電報達於欧洲各国之新聞紙館。皆称西班牙幼王阿豊瑣第十三世有疾。不能聽朝。病雖非劇。頗慮伝染。時太后摂政。自率兩侍者与王同居。親視湯藥。又下令禁絶交通。其特許出入王之病室者。侍医之外。惟師傅奧利威暨宰相鴉士他拉兩人。此消息伝播遠近。人莫不信

以為真。而不知王実非病。盖被拐耳。有願聞其詳者。余請述之。 75頁

2年前の某月某日、突然、欧洲各国の新聞社に電報が送られスペインの幼王アルフォンソ13世が病氣になり政務を行なうことができない、病氣は劇症ではないとはいえ頗る伝染の恐れがあるという。時の摂政太后は自らふたりの付添人を引き連れ王と同居し親しく看護したのだった。また宮中の交通を禁じる命令を出された。特に許可され王の病室に出入りすることのできる者は侍医のほかにはただオリヴァ師傅とガスタラ宰相のふたりだけだ。この消息がひろく伝えられるとそれは本当のことだと信じないものはいなかった。しかし王は実のところ病氣ではなく誘拐されていたとは知らなかったのだ。詳しく聞きたいのであればお話ししよう。

羅普の漢訳は蘆花日記のままを伝えているといえることができる。この部分では削除も加筆もないからだ。

羅普は「アルフォンソ」に「阿豊瑣」を当てて忠実だ。次に示す喋血生が「約芬」としたのとは異なる。訳者が違うのだから固有名詞の漢訳方法が異なっているのは不思議ではない。

次は喋血生漢訳だ。

【喋血生】曩年欧美新聞。喧伝西班牙王約芬十三世。是閱兵帰。驟罹奇症。不省人事。太后驚痛欲絶。日夜湯藥。王師傅奧維亞僧正。与宰相格湯。及御医二人。亦不離左右。惟以勢危故。問疾者多不許入觀。韶華駒走。惡事逼人。勿藥之喜終無日ト。 1頁

昔ヨーロッパとアメリカのニュースがスペイン王アルフォンソ13世が閱兵から帰って突然奇病にかかり人事不省となったと喧伝した。太后の驚きと悲しみは頂点に達し日夜看病をしたのだった。王の師傅オリヴァ

ア僧正とガスタラ宰相および医者ふたりがそばを離れない。病状が危険であるため見舞客も多くは拝謁を許されなかった。素晴らしい時間はあっという間に過ぎ去り悪事が迫ってきて薬の服用をやめる喜びはいつになるのやら見当もつかない。

先に見た喋血生による蘆花の解説文はよく日文を理解していた。それに比べるとこの漢訳は蘆花日訳から離れている。ニュースが流された地域になぜかアメリカまで加えた。幼王が奇病にかかって太后がつきっきりで看病をしていること、また医師のほかには師傅と宰相が面会を許されていることは伝わってくる。しかしその大筋以外はすべてを省略しているのだ。大幅な簡約化であるといわざるを得ない。

後述するが幼王が行方不明になった経過を後ろ部分に移動した。そればかりか蘆花訳では大使が詳細を説明しているにもかかわらず喋血生漢訳では太后みずから大使に話したように変更する。

喋血生の改変ぶりをもうひとつ見る。虚言によって宮中から連れ出される際の幼王の様子を原作と比較対照する。

【原作】 The King himself, it is needless to say of a boy of seven, was only too eager to go. He is a youngster daring as a lion, and to whom shyness is absolutely unknown. p.15

王自身は、いうまでもなく7歳の少年だからこのときばかりは行きたがっていた。彼はライオンのように大胆で、人見知りを全くしない若者なのだ。

【蘆花】王は固より獅子の如く猛き小供、物に臆れぬ人なれば、勇み立つて出で行きたり。 121-122頁

【羅普】王固年幼而氣盛。不識利害者。於是昂昂然挺身以去矣。 77頁

王はもとより幼く驕っており利害を知らない人だから自信にあふれて身体をそびやかせて出かけた。

【喋血生】時幼王聞諭。狂喜作獅子舞。不待師傅裁判。急欲行。愛弼商起辭。幼王止之曰。稍待。偕行甚佳。愛弼商復請曰。陛下蓋遣禁衛兵護行。幼王揺手曰。迂。迂。朕不如携此鉛製軍隊往。頗慰寂寥也。遂忽忽行。 3-4頁

その時、幼王は(太后からの)御命令を聞くと獅子舞のように飛びあがって大いに喜んだ。師傅の決定も待たずに急いで行こうとする。エスピノサが立ち上がって下がろうとすると幼王は止めて言った。「待て。一緒に行くのがよいぞ」。エスピノサは重ねて述べた。「陛下、近衛兵が護衛をいたしますから」。幼王は手を振った。「くどいぞ。朕は鉛の兵隊を連れて行く。寂しさを紛らわせるのだ」。そうしてたちまち行ってしまった。

蘆花訳は原作をほぼ保っている。羅普漢訳には「獅子」がないがそれほど外れていない。

ところが喋血生漢訳はそれらとは違う。こまかく手を加えている。蘆花の「獅子の如く」から「獅子舞」を連想したものか。さらに「鉛製軍隊」である。想像を少々超える。

原作では太后が幼王に留守を命じた際に与えた遊ぶための玩具として出てくる。「鉛の兵隊が入った大きな箱、それはいつも彼に最高の喜びを与える玩具だった [a huge box of lead soldiers, a toy which has always given him supreme delight]」(p.13)だ。蘆花はそれを「王が気に入りの玩具なる鉛製の兵隊一大箱を与ふ可き……」(120頁)と直訳した。羅普もほぼ同じ。「慰めるために鉛製軍隊の人形一大箱を見せた [見給鉛製軍隊偶人一大箱。以慰藉之]」(76頁)。兵隊の人形を喜ぶのは原作にある7歳の幼王だからだ。蘆花が12歳としたのは

不具合だという理由になる。

該当箇所は喋血生も漢訳している。「太后は鉛製軍隊の人形で機嫌をとった〔太后以鉛製軍隊偶形賺〕」(3頁)。それでやめていればよかった。しかし上記のように太后に呼び出された時に再び鉛製軍隊の人形を登場させた。幼王は一度は足止めされた観兵式に出席できるだけで大喜びなのだ。さびしく感じるなど論外である。人形の一大箱を運ばせるのは余計な加筆だった。とはいえ喋血生はそうは考えなかったからそうした。

喋血生の改変

喋血生の漢訳には加筆と削除、さらに話題の前後を勝手に入れ替えるなどの変更改が混在している。

幼王が誘拐されたという事実は伏せられることになった。知る人は太后、師傅、首相などのごく限られた人々だ。政治状況からして真相が漏れると革命が起こる恐れがある。そこで病気になったことにして秘かに行方の捜査を始めた。大使は偶然にマドリッドに滞在中でよく知った幼王の病気を聞き見舞いに参じたが追い返されてしまった。

大使がマドリッドにいたという何でもない部分を見る。

【原作】 But for the accident of my presence in the capital, it is difficult to say what would have become of the Spanish monarchy. Luckily I chanced to be in Madrid at this time. p.18

しかし私が首都にいたという偶然がなければスペイン王政はどうなっていたかわからない。幸運にも私はその時マドリッドにいたのだよ。

【蘆花】 斯時余が首府馬德里土に居合はさざりせば、西班牙王政の運命未だ知る可からざるものありしならむ。素より当時余

は該国に駐割したるにはあらず、或事情の爲めに偶然居合はしたるなりき。 124-125 頁

【羅普】 若使当時余不在馬德里。則西班牙王政之運命。正未可知耳。吾當時非奉使命駐紮西都。只為某事。偶然在此句[勾]留者也。 78頁

もし当時私がマドリッドにいなかったならばスペイン王政の運命はどうなっていたかわからなかった。私は当時スペイン首都に駐在していたわけではない。ある事情のため偶然滞在していたのだ。

【喋血生】 省略する

物語の大筋に影響があるという個所ではない。幼王が病気だと報じられた時、その場所に大使がいたというだけの話だ。しかしこういう小さいところを訳者がどう扱うかに翻訳者の姿勢があらわれる。

上を見れば明らかだ。蘆花、羅普ともに翻訳している。しかし喋血生は無視した。喋血生は羅普とは違って蘆花日訳の順序とおり丁寧に漢訳する考えがなかった。

喋血生の漢訳方法を知るために次の個所を示す。幼王誘拐を表ざたにしないまま捜査が続く。幼王を送り出した衛兵から事情聴取したのは警察だ。

【原作】 “The porters who had seen the carriage drive away were also questioned with caution, but beyond the mere statement that they had seen his Majesty enter the carriage with the officers, no information of any value was elicited from them. p.17

馬車が走り去るのを見たという門衛たちも注意深く尋問されたが、陛下が将校たちと馬車に乗り込むのを見たということ以外なら価値のある情報は彼らから引き出す

ことはできなかった。

【蘆花】件の馬車の馳せ去るを見しと云ふ皇宮の門衛等に其となく様子聞きたゞずに、唯王陛下が両将校と馬車に乗らせ玉ふを見たりと云ふのみにて、物の用に立つ可くもあらず。 124頁

【羅普】以王宮守備。曾見彼馬車来往。乃就訊當時情狀。仍不得頭緒。 78頁

王宮の門衛があゝの馬車が入り出したのを見たというので当時の状況を尋問したがやはり手がかりはなかった。

蘆花訳は原作にはほぼ忠実だ。羅普漢訳も簡略化はしているが要点ははずしていない。

ところが喋血生は奇妙な風に改変創作した。呼び出した衛兵を太后自らが尋問することに変更するのだ。会話にしているからカッコを使って訳す。

【喋血生】太后急問曰。司閹何人。速伝至。未幾衛士至。答即司閹者。太后問曰。見陛下往乎。答曰見。一衛士欲言不語。太后曰何言。衛士曰。陛下曾冒疾早太后一勾鐘帰也。空車与将士去時亦均親見之。太后曰果然。答曰無誑言也。惟陛下憑式而臥。勢甚委頓者。咄咄怪事。定師傅有謀為不軌之舉動也。不然豈深宮中別有桃源。而可以藏匿陛下歟。是何難奇之甚也。 4頁

太后は急いで問うた。「門衛は誰じゃ。まいいれとすぐに伝えよ」。ほどなく門衛が来ると門番だと答えた。「陛下が行かれたのを見たのか」「見ました」。もうひとりの門衛がもの言いたそうにしていた。「何かいう事があるのか」「陛下は御病氣らしく太后様よりも1時間早くお帰りになりました。無人の馬車と将兵が去る時にもこの目で見ました」「そうなのか」「嘘ではございません。ただ陛下は横木にうつ伏せにもたれかかられており、すこぶるお疲れの御様子でした」。こ

れはこれは、怪しげな事だ。さだめし師傅がはかった反逆の挙動であろう。そうでなければこの宮中に桃源郷があって陛下を隠匿できているというのだろうか。なんと奇怪なことよ。

門衛の回答は蘆花訳では別の個所に出てくる。喋血生はそれの一部をここに混ぜ込んだ。上に述べられた事情は大使が太后に面会した際に説明されたものだ。喋血生は会話体に変えて漢訳した。

それにしても太后が門衛に直接下問するなどという設定自体がありえない。そうとは思わなかったものか。本来それらは第三者の仕事である。原作、蘆花日訳、羅普漢訳もそうになっている。しかも信頼しているオリヴィア師傅だからこそ幼王の病室に入室を許可されていると公表しているのではないか。喋血生漢訳で師傅を疑うのはそれと矛盾する。幼王の居場所が不明だから誘拐事件になっている。ところが喋血生は幼王がすでに帰還していると改変した。重大かつ余計な変更だ。最後部分を書き換えた辻褃合わせでそうした。

公的には幼王が宮中で病臥していることになっている。しかし物語の順序として幼王は宮中以外の場所に誘拐されていなければ事件にはならない。この時点で宮中に隠れているというのでは事件性が著しく低下する。大使が探偵役をかって出て調査したあげく幼王が意外にも宮中にいたことを発見するのが終局だ。誰も想像しなかった結末だからこそ探偵小説になっている。中途半端な個所で示唆したために結末の衝撃度が小さくなった。喋血生の書き換えは物語を本来の話の筋から逸脱させたのだ。

喋血生が行なった改造をもう少し見る。

太后は大使に身代金要求の手紙が来たことを告げる。見れば100万ペセタと赦罪の保証を求めており署名は「黒魔王 [the Black Hand]」(129頁/p.22)だ。そういう記述になってい

る。原作どおり蘆花も羅普も地の文で説明した。ところが喋血生はわざわざ手紙文に書き換える。さらに承諾の返事を新聞に掲載しろ、身代金はスペイン銀行に置いておけ、と詳しく指示する加筆もしている。極め付きは次の個所だ。「さもなくば3日以内にアルフォンソ13世の血肉で宮中の生ジュースを満たしてやる〔否則三日内即以約芬十三之血肉来充爾宮中之鮮菓汁〕」(5頁)

殺害の脅迫だ。しかし突然、生ジュース(鮮菓汁)が提示されるから何のことかと戸惑う。これは喋血生が付加した犯人についての暗示なのだ。原作には存在しない。喋血生は物語の全体を理解している。羅普のような普通の漢訳者ならばそのとおりに翻訳する。しかし喋血生は蘆花日訳のままに漢訳する考えがなかった。自分がかかわったという独自の痕跡を残したかったようだ。

上記の脅迫状につづく部分も喋血生は創作した。

【喋血生】余翻閱再三。不禁狂喜。連連拍手曰。得之矣。得之矣。 5頁

私は(脅迫状を)再三うち眺めた。そうして大喜びせずにはいられず続けざまに手を打って言った。「わかった、わかった」

大使はイギリスの医者に変装して宮中において調査する段取りになっている。それにもかかわらず調べる前から犯人が判明したと大使に言わせた。喋血生は深く考えている。しかし底本にないから外から見れば軽率な書き換えになる。

脅迫状を見た大使は差出人が「無政府党〔Anarchists〕」(129頁/p.22)ではないと判断した。喋血生漢訳だけがそこを省略する。

どうやら喋血生は手を加えなければ漢訳する意味がないとでも思っているらしい。原文にない部分を付け足して詳細に描写する一方で大きく簡略化する理由である。これらの不可思議な

改変は物語の終局部分でさらに驚くべき状況を出現させることになる。喋血生はすべてを理解して書き換えているのだ。

喋血生は別作品にした

大使は医者に変装して宮中を捜査してまわった。免職された料理長が怪しいとにらみ踏み込むと鍵のかかった寝室に幼王が焼き菓子を食べしていた。幼王発見の瞬間だ。焼き菓子とはタルト(原作:tarts p.37/蘆花:菓膏 144頁/羅普:菓物 88-89頁/喋血生:菓餌 7頁、鮮菓汁 8頁)である。喋血生が菓餌と鮮菓汁の2種類を出しているのが蘆花とは違う。 unnecessaryな加筆だ。

【原作】“there, seated on the floor, amid a disorganised army of leaden troops, his hands black with dirt, his hair rough like a dog's, and his charming lips all smeared with jam, I beheld his Majesty the King of Spain, calmly devouring one of his favourite tarts.” pp.36-37

そこには、鉛製の兵隊が散らばっている中で床に座り、手は真っ黒に汚れたまま髪は犬のように乱れて魅力的な唇はジャムでまみれたスペイン国王陛下がお気に入りのタルトを静かにむさぼり食べているのが見えた。

【蘆花】果然、果然、其處の床の上、鉛製の兵隊人形あまた取り散らしたる其中に、手は真黒に汚れ、髪は犬の如くあら立ち、可愛ゆき唇にジャムを塗(まみ)らしつゝ、好物の菓膏を悠々と喫し居るは、まかふ方もなき西班牙国王陛下に在しける』。 144頁

【羅普】則見牀上有無數鉛製偶人。狼藉不可言狀。又有一人蟠坐其中。手積塵垢。如塗漆然。唇点臙脂。如嘔血然。髮蓬蓬如獅子狀。方張口啖菓物。嗚呼。彼何人斯。豈

非四日前所失去之西班牙国王阿豊瑣第十三其人乎。 88-89頁

見ればベッドの上には無数の鉛製人形があつて言うようもなく取り散らかっている。その中であぐらをかいて座っている人がいる。手は垢によごれて真っ黒、唇は血を吐いたように脂ぎっており髪はぼうぼうでライオンのよう、ちょうど口を開けて菓子をむさぼり食べている。ああ、この人は誰だ。4日前に行方知れずとなったスペイン国王アルフォンソ13世その人ではないか。

【喋血生】省略する

幼王発見の状況が細かく描写されているのがわかる。蘆花も羅普も原作に忠実だ。原文の the floor は蘆花の「床(ゆか)」で正しい。漢語ならば「地板」。ただし「とこ」と読めば「ねどこ」になる。羅普は日本語の「床」をそのまま流用したから漢語の意味は「寝台、ベッド」である。床でもベッドでもそこに幼王がいたことには変わりがない。

それでは喋血生はそこをなぜ漢訳しなかったのか。料理長の寝室に幼王が隠されているのではないかと大使が推理し扉を押し開けたところまでは似たような描写になっている。だがそこに座っていたのは幼王ではなく別人だった。次のとおり。

【喋血生】豈知乃一与陛下年齢相当之小兒席地而坐並不見有陛下也。 7頁

なんと陛下と同年配の子供ひとりが床に座っているだけで陛下はいないのだった。

では幼王はどこにいるのか。喋血生は次に意外な書き換えをしている。

【喋血生】忽聞一片喧伝衛士。乱呼師傅盜陛下。師傅盜陛下。陛下在矣。陛下在于師傅寢室地板下。 7頁

「師傅が陛下を盗んだ。師傅が陛下を盗んだ。陛下はいまします。陛下は師傅の寢室の床下にいまします」と衛士があたり一面呼ばわっているのがふと聞こえた。

発見者が大使ではないのが原作と異なる。宮中では幼王が誘拐されている事実は知らされていないのが前提だ。ところが上の台詞からは衛士も探していたことにしている。ここは喋血生の大きな勘違いである。しかもあたかも師傅が幼王を盗んだかのように誤った印象を与えるように記述した。喋血生は先に「さだめし師傅がはかった反逆の挙動であろう」と述べていた。それをここで結び付けた。

幼王は太后に抱き着いて事情を説明する。観兵式に行く馬車の中で眩暈をもよおす砂糖菓子を食べさせられ料理人の家に押し込められた。殺し屋が来るというので地下室に閉じ込められる。そこに地下道があつてどうにかたどり着いたそこは読書室だった。

読書室というのは師傅が幼王を教える場所だ。その床下で幼王が発見されたから「師傅が陛下を盗んだ」という誤伝につながる。喋血生なりに工夫をしている。とはいえ原作にない地下道を造り出すのは無理にもほどがある。

幼王は自力で料理長ゴメツの拘束から逃れたというのだ。これでは大使という探偵の活躍どころが消失してしまう。料理長の告白によると観兵式に出かけたのは本物の王であつて戻ってきたのは料理長の甥だという(出者真王。還者乃罪人之姪。8頁)。喋血生が創作した門衛の証言「ただ陛下は横木にうつ伏せにもたれかかられており、すこぶるお疲れの御様子でした」というのがゴメツの甥だった。その甥は帰還時に確認されなかったのかという疑問が生じる。そこをうやむやにしているから辻褃が合わない。ゴメツの証言とは逆に甥が幼王の身代わりとなつて出て行ったという原作であつてこそ話の筋が通る。喋血生はそこを取り繕つて幼王は後に

宮中に連れ戻されたことにした。二度手間をかけて話を複雑にただけ。改変する意味がない。

料理長ゴメツの作る生ジュース(鮮菓汁)を幼王は好んだ。ところがクビになったので幼王誘拐を思いついたという。この生ジュースが脅迫文に使われたというわけ。それにしても焼き菓子(菓餌)とは異なる。いらぬ細工だった。

原作の仕掛けは、観兵式に出かけたのはゴメツの甥だったという点にある。偽の将校が別人を幼王といつわって連れ出した。幼王は出発する前にゴメツによって捕らえられ監禁されていたというのが真相なのだ。幼王は最初から最後まで宮中にいた。それを捜査のうえで探し当てたのは大使の手柄だ。喋血生の改変したように連れ戻された幼王が地下道を抜けて独力で脱出したというのでは大使が主人公の物語として成立しない。

喋血生は考えて手を加えた。しかしその結果は原作のよさを台無しにしてしまった。

結 論

清末民初時期の翻訳界では削除、加筆などの改変は自由に行なわれていた。直訳でなければならないという風潮になったのはその後のこと

だ。その事実を押さえておく必要がある。

筆者の漢訳に対する評価基準は変わらない。あらためて述べれば次のとおり。底本に忠実であることを基本的に重視する。改変は程度問題として個々の実例を見て判断する。

蘆花の日記は少しの改変と省略はあるが原作にほぼ忠実だ。羅普は原作者をフランス人だと誤解していた。また蘆花の解説文は省略する。そこを除いて漢訳の全体は蘆花日記をよく把握して上質である。

喋血生の漢訳(本人は翻訳だとは言わない)は蘆花が加筆した解説文だけは丁寧に翻訳した。しかし本文の細部をそぎ落とす、あるいは創作する。話題を入れ替える、地の文章を手紙文に改変する。そうして問題解決の頂点である幼王発見の場面を書き換えた。事件を解決した大使の存在意義を消滅させたのだ。喋血生漢訳は幼王誘拐事件の骨格を提示しただけの貧相なものになった。大きく翻案した。

喋血生漢訳は多くの改変を行なっている。その意味では興味深い。研究の材料を提供しているということだ。しかし漢訳作品として見たばあい底本内容からかなり離れる。評価は低くならざるをえない。 ㊦

王の紛失固有名詞対照表

ALLEN UPWARD	蘆 花	羅 普	喋血生
Alfonso XIII	アルフォンソ十三世	阿豊瑣第十三世	約芬十三世
Father Olivia	オリヴァ師傅	師傅奧利威	師傅奧維亞
Senor Guastala	ガスタラ宰相	宰相鴉士他拉	宰相格湯
Madrid	マドリッド馬德里土	馬德里	馬德里(利) ㊦
Pamplona	パムプロナ局	不羅拿局	柏謨普訥
Don Carlos	ドン、カルロス派	喀爾羅党	董克崙派
General Espinosa	少将エスピノサ	少将埃士俾諾沙	大将愛弼商
the Queen-Regent (摂政女王)、 Her Majesty, Queen Christina	太后マリア、クリスチアナ	太后	太后瑪麗雅
Emile Gerault et Cie.	巴里玩具店アミール、ゲラル商会	巴黎某古董舖	巴黎玩品商店
Hapsburgs	ハプスブルグ家	哈不士巴家	×
Harry Brown	ハアリー、ブラオン	哈利不拉翁	蒲蘭温
Dr. Henarez	ヘナレツ	耶拿列	遇庭
Gomez	ゴメツ	戈滅	郭懋士
Robinson Crusoe	ロビンソンクルソー	魯辺遜	×
Pedrillo Gomez	ペドリロゴメツ	俾里羅	姪

外交奇譚作品対照表 (原作番号はそのまま。日訳の作品番号は便宜的に付した。初出は主として『国民新聞』。改題作品のみ原題を示す。未見を含む。樽目録を参照)

ALLEN UPWARD	蘆花	漢訳題名	漢訳者	掲載 収録
1 A STOLEN KING	5 王の紛失	竊皇案	法人某著、中国某訳	『新民叢報』第33-34号 1903.6.9-6.24 (『説部腋』と同文)
		返魂香	喋血生	『浙江潮』第8期 1903.10.10
		竊皇案	披髮生(羅普)重訳	横浜・新小説社 1905
		竊皇	披髮生(羅普)訳	『説部腋』1905.11.21 (『新民叢報』と同文)
2 THE HONOUR OF AN EMPRESS	6 鞭の痕	(外交小説)一条鞭	未署訳者名(秋士 ^{xx})	『外交報』第97-98期 1904.12.1-11 訳者は秋士ではない
		(短篇小説)一条鞭	秋士	『復報』第4期 1906.9.3
3 ASERAGLIO SECRET	7 土京の一夜	(外交小説)波斯剪	未署訳者名	『外交報』第96-97期 1904.11.21-12.1
4 PRINCE BISMARCK'S FALL	1 鉄公の退隠 初出不明	外交家之狼狽	法国某著、中国某訳	『新民叢報』第27、29号 1903.3.12、4.11 (『説部腋』と同文)
		俾斯麦之狼狽	披髮生(羅普)訳	『説部腋』1905.11.21 (『新民叢報』と同文)
5 "PRINCE CITRON"	10 とりかへ子	(外交小説)易児説	未署訳者名	『外交報』第98-99期 1904.12.11-21
6 A ROYAL FREEMASON	11 三刺客 (北歐朝廷異聞)	(外交小説)三刺客	未署訳者名	『外交報』第99-100期 1904.12.21-31、 1905.1.10
7 A SCANDAL AT THE ELYSÉE	3 百合の花	(海外奇譚)百合花	未署訳者名	『新民叢報』第12号 1902.7.19 (『説部腋』と同文)
		百合花	闕名	『説部腋』1905.11.21 (『新民叢報』と同文)
		(海外奇譚)百合花	不記	横浜・新小説社 1905
		百合花	不記	『新稗海』刊年不記
		百合花	選録	香港『広東日報』1906.1.4-8。底本は漢訳「百合花」
		(政治小説)百合魔(一名麦瑪韓辭職記)	泣紅(周瘦鵠)	『小説月報』第2年第3期 1911.4.23 底本は漢訳「百合花」
		百合魔(一名麦瑪韓辭職記)	泣紅(周瘦鵠)	『広益叢報』第9年第13期(第269号) 1911.6.25
		百合魔(一名麦瑪韓辭職記)	泣紅(周瘦鵠)	『説林』第3集 1914.1
百合魔	泣紅(周瘦鵠)	『国魂小説集』刊年不明		
8 THE GHOST OF THE WINTER PALACE	4 冬宮の怪談	(語怪小説)俄皇宮中之人鬼	曼殊室主人訳	『新小説』第2号1902.12.14 (『説部腋』と同文)
		俄皇宮中之人鬼	曼殊室主人訳	『説部腋』1905.11.21 (『新小説』と同文)
		(語怪小説)俄皇宮中之人鬼	梁啓超重訳	横浜・新小説社 1905
		俄皇宮中之人鬼	著訳者不記	『萃新報』第1-3期 1904.6.27-7.26
		俄皇宮中之人鬼	梁啓超著	『小説零簡』1916.9
俄皇宮中之人鬼	梁啓超	『小説伝奇五種』1936.3		
9 THE TOMB IN THE VATICAN	8 法王殿の墓	(外交小説)瑪瑙印	未署訳者名	『外交報』第72、77期 1904.3.31、5.19
10 THE WHITE THREAD	2 白糸	(外交小説)白絲線記	法国某著、披髮生(羅普)訳	『新小説』第6号 1903.8.7 (『説部腋』と同文)
		(外交小説)白絲線記	(日)週遊生訳、中訳者不詳	横浜・新小説社 1903
		白絲線	披髮生(羅普)訳	『説部腋』1905.11.21 (『新小説』と同文)
11 THE PERFDY OF MONSIEUR DISRAELI	9 一億万法(一億万法の賭博)	(外交小説)埃及妃	未署訳者名	『外交報』第77、92、93期 1904.5.19-10.23
12 MADAME THE AMBASSADRESS	12 大使夫人 初出不明	(外交小説)紅花球	未署訳者名	『外交報』第93、96期 1904.10.23、11.21

【参考文献】

稻村徹元編「年譜」『明治文学全集』42「徳富蘆花集」筑摩書房1966.5.10
『徳富蘆花探偵小説選』論創社2006.1.30。横井司「解題」

【注】

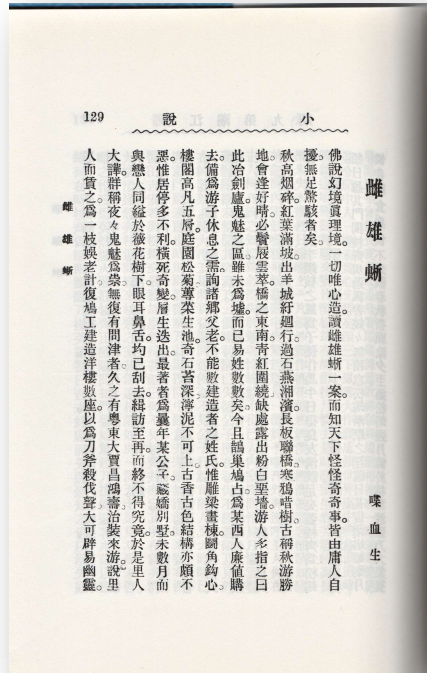
- 1) 陳玉堂編著『中国近現代人物名号大辞典(全編増訂本)』杭州・浙江古籍出版社2005.1。788頁
- 2) 徐兆璋著、蘇醒整理『徐兆璋雜著七種』南京・鳳凰出版傳媒股份有限公司、鳳凰出版社2014.3 中国近現代稀見史料叢刊 第1輯

蘆花「巢鴨奇談」と喋血生「雌雄蜥」

荒井由美

喋血生「雌雄蜥」の底本

喋血生「雌雄蜥」(『浙江潮』第9期 光緒二十九年九月二十日(1903.11.8)。影印本)である。喋血生だけを出して「訳」は表示していない。創作のように見える。しかし翻訳だ。



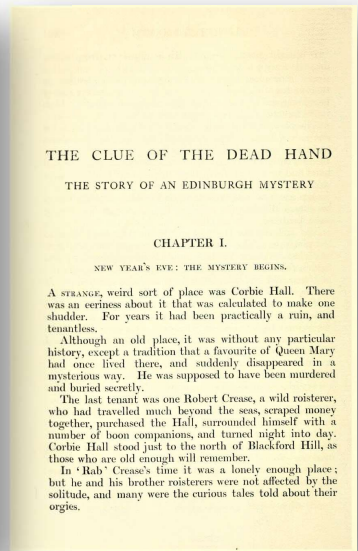
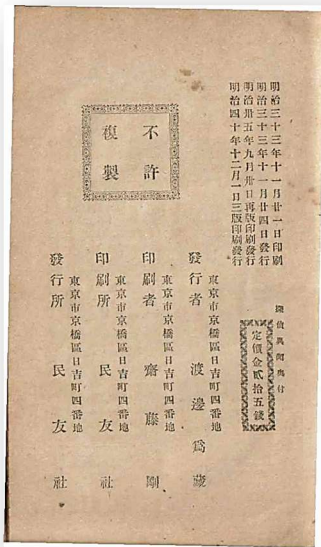
清末小説から 第150号

2023.7.1

- 包天笑漢訳「新造人術」——原作と底本 …………… 神田一三
- もうひとつの漢訳ル・キュー「虚無党奇談」——松居松葉『虚無党奇談』 …………… 沢本香子
- 漢訳デラノイ『鉄錘手』の原作 …………… 荒井由美
- 吳禱漢訳小説の特色 …………… 樽本照雄
- 《2014・2016年東亜近代翻訳文学研究綜覧》之辨正 …………… 付 建舟
- 「説部叢書」の箱売り——商務印書館の販売活動 …………… 樽本照雄

梁艷+王玉 (2020) *1によると徳富蘆花訳「巢鴨奇談」(目録中為「巢鴨の奇談」)。『探偵異聞』民友社1900.11)という。そこまでわかれば英文原作が出てくる。

次号の公開は2024年1月1日を予定しています
清末小説研究会 <http://shinmatsu.main.jp>



蘆花訳『探偵異聞』の原作

徳富蘆花『探偵異聞』（民友社1900.11.24/1907.12.1三版）の原作については長らく不詳だったらしい。2006年時点で原作不明とされていた*2。

その後、藤元直樹（2019）*3が原作を特定した。すなわち DICK DONOVAN、“THE CHRONICLES OF MICHAEL DANEVITCH OF RUSSIAN SECRET SERVICE,” (LONDON:CHATTO & WINDUS, 1897) だ。

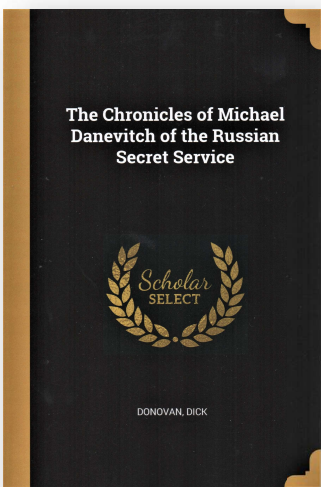
それにより樽目録第12版（2020）より原作を注記している。

ディック・ドノヴァン (DICK DONOVAN。本名は JAMES EDWARD PRESTON MUDDOCK、1843-1934) である。

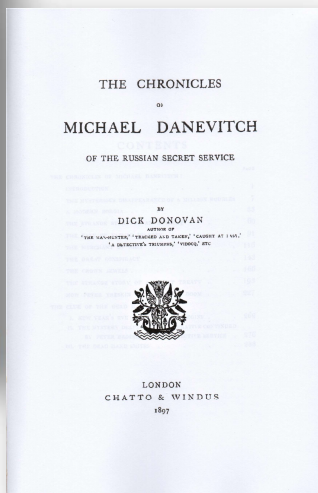
書名は『ロシア諜報部ミカエル・ダネヴィッチ年代記』となる。原作が英語だからマイケルでもよい。ただし蘆花はミカエルを使用した。それを尊重する。「前書き [INTRODUCTION]」において著名な探偵ミカエルと知り合い彼から体験談を聞き、譲られた記録にもとづき一連の物語を編纂したと説明する*4。

原作は短篇9本と中篇小説1本の2部によって構成される。短篇は世界的に有名な探偵ミカエル・ダネヴィッチが記録した異常な事件簿だ。もうひとつの独立した中篇小説は「死んだ手の手がかり [THE CLUE OF THE DEAD HAND]」という。注意すべきことがある。中篇小説に登場する探偵はミカエルではない。ピーター・ブロディ (Peter Brodie) なのだ*5。

このブロディが登場する中篇小説が蘆花訳の底本である。「死んだ手」に握られていたものが殺人事件解決の手がかりとなった。それを題名にしている。内容は怪談と癡情の果てに引き起こされた殺人事件だ。恐怖小説の要素を持ちながら探偵が登場して事件を解決するから探偵



影印本



小説でもある。

蘆花生「探奇秘聞録 巢鴨奇談」(『国民新聞』1897.9.1-14。未見)が初出という。本稿では(徳富蘆花名なし)『探偵異聞』(民友社1900.11.24/1907.12.1三版)所収の該作品を使用する。著者を明記しないが巻末広告に蘆花生編著の1冊に『探偵異聞』を掲げている。蘆花の著作である。

蘆花による換骨奪胎

題名の「巢鴨奇談」からも理解できるように場所は日本に設定されている。登場人物はアメリカ帰りの松崎五蔵、連れて来たヂオルヂがアメリカ人である以外は全員が日本人だ。ドノヴァン原作であるという手がかりがどこにもない。藤元直樹の指摘があるまで122年間も原作不明であった理由である。

原作、蘆花訳(ルビ、傍線省略)、喋血生漢訳の冒頭を見る。

【原作】A strange, weird sort of place was Corbie Hall. There was an eeriness about it that was calculated to make one shudder. For years it had been practically a ruin, and tenantless. p.262

コービー・ホールというのは奇妙で薄気味悪い場所だった。人を震え上がらせるような不気味さがあつた。何年も廃墟と化しており入居者もいない。

【蘆花】秋末となれば瀧野川の往き返り、好事の人は必ず此處の紅葉に車を駐むる巢鴨植長より一丁ばかり板橋の方へ行きて、今は伯爵某氏の別荘となりたるが、つひ先年迄は此界限に幽霊屋敷とて、可厭な物の一に数へられし屋敷ありけり。1頁

原作はスコットランドの廃墟を舞台にする。蘆花はそれを力業で東京巢鴨に移し替えた。廃墟と幽霊屋敷が似ているといつてもいいが冒頭

から別作品である。

原作では続いてその場所にまつわる故事を披露する。メアリー女王のお気に入りがかつて住んでいたが突然姿を消した。殺されて埋められたという伝説だ。

蘆花はその部分について独自に長々と創作した。昔、幕府では内藤何某の守の屋敷だった。豪邸がいかに広く部屋数が多いか、それを詳細に説明する。愛妾が近習と不義の挙動に及び殿様が激怒し鬨り殺しにして以来、巢鴨のお化け屋敷となった、云々。

両者の文章は一致するところがない。ただし恐ろし気な雰囲気は共通する。蘆花は原作のままに順序だてて翻訳する考えは最初からなかったと見える。物語の骨子だけを拝借して独自の作品を書きたかつたらしい。これでは翻訳ではなく翻案である。

蘆花日訳と喋血生漢訳

その蘆花日訳にもとづいたのが喋血生漢訳だ。冒頭で次のように述べる。

【喋血生】仏説幻境真理境。一切唯心造。読雌雄蜥一案。而知天下怪怪奇奇事。皆由庸人自擾。無足驚駭者矣。129頁

仏説に幻の世界と真理の世界はすべて心が造り出したものだという。この「雌雄蜥」という事件を読めば天下の奇怪なことはすべて凡人が空騒ぎしているだけで驚くに足りないのだ。

なんという前書きだ。凡人の空騒ぎとまで書くだろうか。小説とはだいたいそういうものだろう。ここは読者に興味を抱かせるような導入部でなければならない。喋血生はどういうつもりで前言を加筆したのか不可解だ。

喋血生が設定した場所は中国南方の羊城だ。すなわち広東省広州である。蘆花が日本化したから喋血生は中国化した。舞台を広州にしたか

らいくつかの不具合が発生することになる(後述)。

もうひとつ言えば、喋血生は蘆花作品があることを言わない。だいいち喋血生は「訳」を示さない。創作と翻訳をわざと区別していないかのようなのだ。

喋血生も蘆花と同じくらい底本に忠実であろうとはしていない。底本はあくまでも借り物であるらしく勝手に文章を創作している。

かろうじて共通する部分を示す。蘆花が作った上述殿様の髑り殺し部分だ。屋敷にまつわる悪評が定着する原因となった。

【蘆花】其昔し内藤某の殿様愛妾お松の方とやらが近習の美男と不義の挙動に及びしを憤怒のあまり、男女共に泉水側の松の根方に縛しつけて、足の指手の指を一つづつに切り棄て、耳をそぎ鼻を切り髑り殺しにせし以来、2頁

【喋血生】最著者為曩年某公子。蔵嬌別墅。未数月而与恋人同縊於薇花樹下。眼耳鼻舌。均已刮去。緝訪至再。而終不得究竟。129頁

最も知られているのは次のとおり。昔ある若様が妾を別荘に囲った。数ヶ月もせず恋人とバラの花の下で縊り殺されていた。眼耳鼻舌はすべて削り取られている。捕縛方が再三訪れたがついに結論を得ることができなかった。

残酷に殺されたという内容だけが同じ。それ以外は喋血生の作文である。

その幽霊屋敷を購入して再建したのはロバート・クリーゼ(Robert Crease)だった。蘆花は倉沢某とし喋血生は広東の大商人昌鴻寿と漢訳した。舞台を広州にしたことに関連する。音から見てクリーゼから倉沢にしたか。すこし苦しい。さらに昌鴻寿では完全に離れる。

クリーゼは事故死した。詳細は別物だが死ん

だのは蘆花、喋血生ともに同じ。彼の甥がいたが行方不明だった。その甥レイモンド・バルフォー(Raymond Balfour)が戻ってきて伯父の財産を受け継いだというのが物語の始まりだ。

レイモンド・バルフォーを蘆花は松崎五蔵に、喋血生は松の連想から松筠(すなわち松竹)とする。

放蕩無頼のバルフォーはインドかどこかで金持ちになって使用人(実は妻)チュンダ(Chunda)を連れてスコットランドに帰国した。

原作では裕福となった過程は説明されない。それを蘆花は作って次のとおり。

松崎はアメリカでぶどう酒の販売に成功し財産を築いてデオルヂとともに日本に帰国した。蘆花は原作のチュンダをそのまま使用せず別名デオルヂを与えた。アメリカ人風にしたかったようだ。

喋血生の漢訳は販売を製造に変えただけで蘆花訳に従っている。西洋人の名前は梭斉 suoqi という。漢音がデオルヂに似ているかといえは微妙だ。「ヂ」と「斉」なら一致するが。

チュンダ(Chunda/デオルヂ/梭斉。注:原作/蘆花/喋血生の順。以下同じ)が物語の鍵人物である。チュンダについての説明が伏線となっているから引用する。

【原作】He was a strange, fragile-looking being, with restless, dreamy eyes, thin, delicate hands, and a hairless, mobile face, that was more like the face of a woman than a man. Yet the strong light of the eyes, and somewhat square chin, spoke of determination and a passionate nature. When he first came he wore his native garb, which was exceedingly picturesque; but in a very short time he donned European clothes, and never walked abroad without a topcoat on, even in what Edinburgh folk

considered hot weather. p.264

彼は奇妙でもろい存在であった。落ち着きのない夢見がちな目、細く繊細な手、髪がなく動きのある顔、男というより女の顔に近い。ただしその強い眼光とやや四角い顎は決意と情熱の表われであった。彼が最初に来た時、絵のように美しい民族衣装を着ていた。しかしすぐにヨーロッパの服を着てエジンバラの人々が暑いと思うような気候でも上着を着ずに外を歩いたことはなかった。

チュンダはインド人 (Indian p.278) である。原作では黒人 (the black fellow p.272, the black servant p.278) とともに表記する。注目点は女性に見まがうところだ。また民族衣装を着ていた。さらにいかに暑くても上着を脱ぐことがなかった。これが物語の伏線になっている。

【蘆花】此ヂオルヂと云ふ男、年は二十を過ぎざる可し、金髪碧瞳、面は牛乳に紅さしたる如く、手足繊く志なやかにして、一躰にやさしき所女とも思はるゝばかりなれど、眼光鋭く炯々として、一たび激すれば如何なる事も為し兼ねまじき氣象は額のあたりにほの見へたり。松崎は帰朝の後も慣れしことゝ洋風の生活を好めば、己も伯父が建て増し置きし西洋造りの方に住みて、ヂオルヂにもほより近くに室を与へ、常に彼此と召し使ひつ。主人は流石に夏の暑さを浴衣に凌ぐ事はあれど、僕のヂオルヂは西洋人の常、行儀を乱さず、衣服整然として、浴みするにも決して肌を人に見せしことなし。 8頁

蘆花はヂオルヂを金髪碧瞳の白人アメリカ人に置き換えた。民族衣装以外は原作をほぼなぞっている。上着を脱がない個所を人に見せないと書き換えて力説した。

喋血生はこの部分を省略する。重要な伏線が失われた。

主人の松崎は柳橋の松代 (本名島村まつ。Maggie Stiven/秦月憐) に入れあげた。芸者としたのは蘆花の改変。原作のマギー・スティヴンはパン屋の娘で兄の酒場で働いていた。

そうして忘年会で発生するのが殺人事件だ。松代が殺された。松崎は大雪に降り込められた屋敷内のどこを探しても見つからない。行方不明である。松崎の失踪と松代が殺されたのはほとんど同時だ。蘆花は原作どおりに訳している。ところが喋血生はなぜだか時間をずらしたうえで衆人のいる場所で秦月憐殺人を発生させている (132頁)。喋血生は独自に物語を作りたいらしい。翻訳する態度ではない。

事件現場に居合わせたのは原作ではインドでバルフォーと知り合った船乗りジャスパー・ジャーヴィス (Jasper Jarvis/松崎の知人月田某/なし) と医者ジェームズ・マクファーレン (James Macfarlane/佐々木某/田吉安) だった。

この難事件の捜査に探偵が派遣された。本篇の主人公だ。名古屋 (Liverpool) で捜索中だったのを東京 (Edinburgh) に呼び戻された。

蘆花は探偵の名前を伏せた。名無しの探偵である。そうした理由は不明。ただ『探偵異聞』に収録した「うらおもて」において説明する。「幸ひ東京より来合はしたる有名の探偵巢鴨の一件を物の見事に遣つてのけたる穴栗専作 (あなぐりせんさく) 氏を擾はして此一件の探明を委託し…… (後略)」 (60頁)。ここから「巢鴨奇談」の探偵も当然穴栗専作になる。普通の解説文はそう説明している。

しかし蘆花の処理は原作に照らして正しくない。「巢鴨奇談」の探偵は原作では既出ピーター・ブロディだからだ。蘆花の改変理由は『探偵異聞』の探偵をひとりだけにして統一性を持たせたかったのだろう。

喋血生は探偵の名前がないのは不自然だと考

えて独自に探偵を設定した。上海にいるフランスの名探偵律月に捜査を依頼する(133頁)。探偵は中国人にしてもよかったと思うがそうできない事情がある(後述)。

探偵による綿密な屋敷の捜査、関係者への聞き込み状況がこまごまと描写される。蘆花は原作を逐語訳はしていない。しかし大筋にしたがってよく写している。

ここに関連して喋血生による独特な創作個所を紹介する。屋敷内を徹底的に精査したが主人松筠の姿を発見することができない。雪の降り積もった屋敷の周囲に捜査範囲が広げられた。池の底に何やら見える。主人が沈んでいるのではないか。皆はそこに足を踏み入れた。

【喋血生】惟見怪石迎人。凍鳥驚飛。池水氷紋。偶有碎痕長徑丈。衆始譁然。以為松筠必溺水中。雖不及見底。細視彷彿。有黑影。衆客解衣跣足。恨不從井救人。田吉安忽叱衆議曰。毋躁水中黑影決非松筠也。諸君請觀遍地凝雪未融。苟有人來。能無足跡耶。聞言。衆心如澆冷水。梭齊亦曰。果然。可用一長竹梢試之。是人果軟也。何如投之鏗然。乃一塊被雪压倒之假山石耳。衆復茫然。梭齊忽寒戰。連呼好冷好冷。 132頁

奇石が出迎え凍った鳥が驚いて飛び立った。ふと池の氷が長く砕けると皆ははじめて松筠が水中で溺れているに違いないと騒いだ。底までは見通せないがなにやら黒いものが見える。客たちは服を脱ぎ裸足になったが命を懸けることはできない。田吉安が怒鳴って皆に説明して言った。「焦るな。水中の黒いものは絶対に松筠ではないぞ。周りの雪が融けていないのを見なさい。もし人が来たならば足跡がないはずがない」。それを聞くと皆は冷水を浴びたようになった。梭齊が言った。「そうですね。長竹で試してみましよう。もし人間であれば柔らかいはずです」。さて当ててみればコツンとい

う。雪で倒された假山の石であった。皆はがっかりした。梭齊は突然身をふるわせ寒い、寒いと連呼した。

上記引用部分は原作にも蘆花訳にも存在しない。喋血生による作文だ。

ちょっと読めばよくできている。行方不明者を探して前のめりになっている人々の心理を描く。それに対して雪に足跡がないと冷静な判断を下して可能性を否定する。梭齊(ゾオルヂ)までも動員しているのが細かい工夫である。

うまく書いているが残念ながら辻褄が合わない。蘆花が書いた東京に雪が降った個所をそのまま漢訳して上の説明なる。しかし喋血生が設定した舞台は広東省広州なのだ。雪も氷もないことを忘れてしまった。うっかりして気づかなかったのか。なぜこのような矛盾を犯したのか理解を超える。作家としての才能はありそうだが一貫性に配慮していないと感じる。

事件解決の糸口が見えない。八方ふさがりになった。こうして上海にいるフランスの名探偵律月が呼ばれて登場する。

蘆花訳では名無しの探偵が到着してからはその探偵の語りに変更される。原作に従った結果だ。だが喋血生漢訳では三人称を継続する。

探偵の現場調査と関係者からの聞き取りが綿密に記述される。犯人を突き止めるにはその手続が必要であることはいまでもない。原作にもとづき蘆花訳もその内容を丁寧に引き写している。探偵小説である所以だ。

ところが喋血生は底本のままにゆっくりと話を進める考えがなかった。調査の過程を大幅に省略したのだ。紙幅の関係かもしれないが探偵小説としては納得のいかない展開である。

探偵は犯罪の動機が嫉妬だという結論に達した。犯人は女性である。プロディはチュンダ(ゾオルヂ)の部屋にある暖炉に金糸を織り込んだ布の燃えカスを見つけた。ここまでは原作どおりに蘆花も日訳している。だが喋血生はそ

れすらも省略した。いきなり梭斎逮捕に話を進めた。

喋血生の改変

探偵はチュンダを試した。船長(月田)に言ってボールをチュンダ(ヂオルヂ)に向けて投げさせたのだ。それがチュンダの性別を確認する証拠となった。すなわちボールを受け取る男性は両ひざを閉ざすが女性は開く。チュンダは男性を装った女性だった。

チュンダはもともとバルフォーの妻だ。バルフォーが帰国後マギーに心を移した。嫉妬に燃えたチュンダがバルフォーを殺した。これが殺人事件の真相である。死んだバルフォーの右手にはチュンダが着ていた上着から引きちぎった切れ端が握られていた。それが原作の題名になっている。

喋血生は記述の順序を入れ替えた。梭斎は帰国するため香港行きの船に乗った。そこで逮捕された。そのあとで探偵律月による種明かしが披露されることに書き換えた。

原作ではチュンダは裁判の前に自殺したと簡単に記述される(この惨めな生物は裁判にかけられる前に自分の首を絞めることに成功した [The wretched creature succeeded in strangling herself before she was brought to trial] p.302)。

チュンダは蘆花によってアメリカ人ヂオルヂになっている。ヂオルヂが逮捕されたあと蘆花も簡潔に結末を述べる。

【蘆花】ヂオルヂは一応取調を済ましたる上、直に横浜なる米領事の裁判に引渡す筈なりしが、此夜拘留所にて縊死しつ。 50 頁

ヂオルヂがアメリカ人という設定に変えたから横浜のアメリカ領事の裁判にかかることになる。その前に縊死したと簡単に述べる。

喋血生はこの部分をふくらませた。まず梭斎に反論させる。

【喋血生】吾美国人。非汝所可治罪。偵探曰。母憂。請一閱貴公使復電。乃探懷中電函授之。展頁略視約曰。

據法蘭西偵探所訟梭斎氏。冒女為男。謀斃中国人松筠夫婦。如係確實無誣。對質後着交送本使署治罪。

於是無可說辭。乃送之往美公使署。是夜梭斎即縊死於拘留所。 136頁

「私はアメリカ人だ。あなたは私を裁くことはできない」「ご心配なく。貴国公使の返電をご覧ください」と探偵は言って懐から電報を取りだして渡した。それにはおおよそ次のように書いてある。

「フランス探偵の訴状によると、梭斎氏は女でありながら男といつわり中国人松筠夫婦を殺した。それが事実で偽りでなければ尋問の後に本公使館に送らせ裁く」

こうして言い逃れはできずアメリカ公使館に送られるとその夜梭斎は拘留所で縊死した。

梭斎(ヂオルヂ)の自殺した場所が異なる。小さい変更だ。当時の広州では治外法権が認められていた。殺人があった場所はその広州なのだから清朝の警察が関与しようにもできなかった。だからこそフランス人の探偵という設定が必要だったのだろう。喋血生はよく考えている。探偵が事件の経緯と真相を説明して物語は終わる。記述の順序を入れ替えた。

喋血生による改変をいくつか見て来た。蘆花の翻訳はもともと翻案である。喋血生はそれをもとにしてさらに翻案した。言い直せば翻訳にもとづいた創作に近づいているということだ。喋血生が本作で「訳」を使用しない理由でもある。なお漢訳題名の「雌雄蜥」とは雌雄同体のトカゲを意味する。女が男を装ったことにちな

む。「蜥」は辞書によれば人格卑劣な小人を意味するからそれを兼ねている。探偵小説の題名としてよくできている。

蘆花の誤解あるいは改変

最後に蘆花の奇妙な説明を取り上げる。

原作のインド人チュンダに関係する。バルフォーとチュンダは結婚して帰国した。しかし彼は土地の女性マギー・スティヴンを愛人にする。これが殺人につながる基本の筋だ。

自殺したヂオルヂの遺書を解説して蘆花は次のように書いた。

【蘆花】文意によればヂオルヂは仮りの名、本名はメーリー・ステヴンスと云ひて、松崎が米国にて娶りし妻なりしが、松崎が帰国の砌り、共に来よ、帰国は一旦の事にて、本国なる財産をそれぞれ整理したる上は、また直ぐに米国へ帰り来て共に棲む可し、
(後略) 50頁

蘆花は原作にはない「本名はメーリー・ステヴンス」を加筆した。それが不可解だ。

ひとつはわざわざヂオルヂの本名を作る必要があるのか。疑問に思う。次に「メーリー・ステヴンス」はどう見ても原作に出てくるマギー・スティヴン (Maggie Stiven) である。蘆花はそれを知っているからヂオルヂの本名とした。しかしいうまでもなく原作ではバルフォーの愛人なのだ。蘆花はそれにもとづき柳橋の松代 (本名島村まつ) を当てはめたではないか。蘆花の加筆説明では両者が重複してしまう。原作でいえばチュンダとマギー・スティヴンが同一人物ということになるのだ。はなはだ不都合である。

原作を知らない読者は疑問にも思わない。だが蘆花が誤解するはずもない。意図的に間違ったというのか。いずれにしても理解不能な加筆である。 罫

【注】

- 1) 梁艶+王玉「喋血生：曇花一現的清末小説翻訳家」『清末小説から』第136号 2020.1.1
- 2) 『徳富蘆花探偵小説選』論創社2006.1.30。横井司「解題」。『探偵異聞』について次のような説明がある。「ただし、残念ながら、今回その原題までは特定できなかった。おそらく原題は *Memoirs of Michael David* (あるいは *Davitt*) であり、創作の探偵小説集というより、当時数多く刊行されていた名刑事の手柄集のようなものと想像される」338頁
- 3) 藤元直樹「明治の翻案探偵小説・知られざる原作の謎——徳富蘆花『探偵異聞』と菊池幽芳『秘中の秘』をめぐって」(『Re-ClaM』vol.2 2019.5.6)
- 4) 『国民新聞』(1897.9.1。未見)掲載の「序」に該当する。『徳富蘆花探偵小説選』(論創社2006.1.30)に収録されている。「昨年の秋死去せし老探偵某は余が知人なり」ではじまる蘆花生名義の短文。ドノヴァン「前書き」にもとづき要約したもの。
- 5) 探偵異聞作品対照表。()は『探偵異聞』収録時に改題 ([藤元19]を参照した)

THE CHRONICLES OF MICHAEL DANEVITCH:

- 1 INTRODUCTION
- 2 THE MYSTERIOUS DISAPPEARANCE OF A MILLION ROUBLES
- 3 A MODERN BORGIA
 - 3 露国探偵秘聞 (毒薬)
- 4 THE STRANGE STORY OF AN ATTACHE
 - 4 雲かくれ
- 5 THE FATE OF VASSILO IVANOFF
 - 7 まがつみ
- 6 THE MERCHANT OF RIGA
 - 2 身中の虫 (うらおもて)
- 7 THE GREAT CONSPIRACY
 - 6 大陰謀 (目次、文中は大陰謀)
- 8 THE CROWN JEWELS
- 9 THE STRANGE STORY OF A SECRET TREATY
 - 5 秘密条約
- 10 HOW PETER TRESKIN WAS LURED TO DOOM
-
- 11 THE CLUE OF THE DEAD HAND:
 - 1 巢鴨奇談 (目次は巢鴨の奇談)
 - I. NEW YEAR'S EVE: THE MYSTERY BEGINS
 - II. THE MYSTERY DEEPENS: THE NARRATIVE CONTINUED BY PETER BRODIE, OF THE DETECTIVE SERVICE
 - III. THE DEAD HAND SMITES

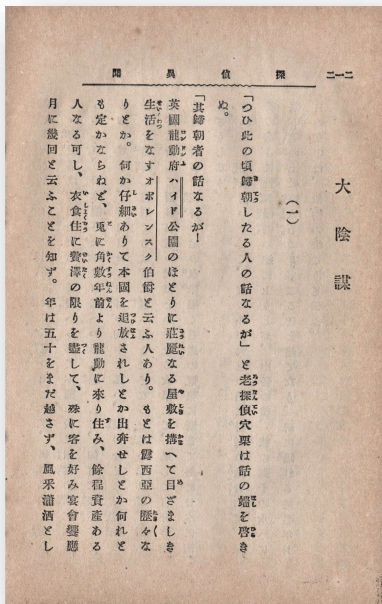
蘆花「大陰謀」と喋血生「専制虎」

神田 一三

先行研究

徳富蘆花「大陰謀」と喋血生「専制虎」について先行研究から抽出する(渡辺浩司、藤元直樹、李艶麗、国蕊、梁艶+王玉などの研究および略号は樽目録の注釈欄を参照のこと。また付建舟教授からご教示を得ました。感謝)。

蘆花生「大陰謀」(『国民新聞』1898.2.10-20掲載。未見)が初出。本稿では(徳富蘆花名なし)『探偵異聞』(民友社1900.11.24/1907.12.1三版)所収の該作品(本文題名は「大陰謀」。文中では「大隠謀」。以下「大陰謀」)を使用する。



その原作は DICK DONOVAN (ディック・ドノヴァン) “THE GREAT CONSPIRACY [大陰謀]” (“THE CHRONICLES OF MICHAEL DANEVITCH OF RUSSIAN SECRET SERVICE,” LONDON: CHATTO & WINDUS, 1897. 影印本 [藤元19]) である。

英文原作から蘆花日訳ができた。そこまではいい。その蘆花訳からふたつの漢訳が作られたところで問題が発生する。漢訳2種類どうしの関係である。

漢訳2種

徐兆璋が冷血訳『虚無党一巻』所収の「綺羅沙夫人」について説明して次のように書く(記号はママ)。

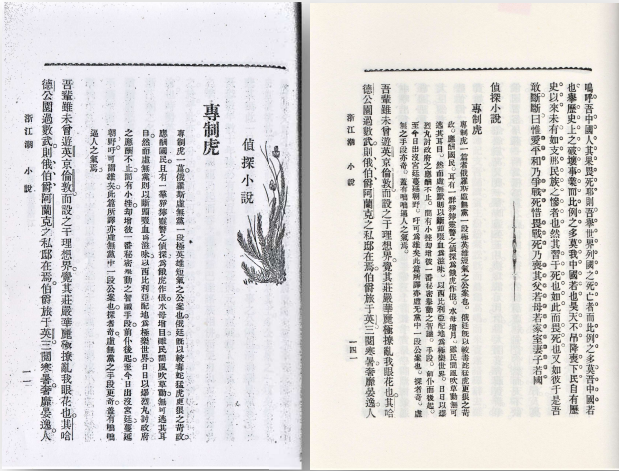
綺羅沙夫人、即喋血生所訳之《専制虎》、《浙江潮》附刊本；米加野、即宓克兒；愛聖夫人、即綺羅沙夫人也。[徐著414]

作品名だから記号を補うならば冒頭は「《綺羅沙夫人》」とするのがよい。訳すまでもない。冷血(陳景韓)「綺羅沙夫人」(1904)は喋血生「専制虎」(1903)と同一作品だと述べている。しかも作品名と登場人物の名前がそれぞれで異なるともある。注意されたい。両漢訳作品に蘆花日訳を示す語句はないのだ。渡辺浩司の指摘があって2015年から蘆花訳だと知られている。

ふたつの漢訳は以下のとおり。便宜的に数字を振る。

1 喋血生「(偵探小説)専制虎」(『浙江潮』第1、3期 光緒二十九年正月二十日(1903.2.17)、三月二十日(1903.4.17)。第1期は無署名。影印本)

国立国会図書館所蔵の『浙江潮』第1期初版には欠陥がある。収録された「専制虎」は3頁



初版／再版

目から別作品の「新浙江与旧浙江」に切り替わっているのだ。つまり該雑誌の「専制虎」には落丁があることがわかった。不完全雑誌である。架蔵の影印本で確認した。推測すれば初版に誤りがあったので再版でそれを修正したのだろう。

2 (日) 渡辺為蔵氏原著、冷血(陳景韓)訳「綺羅沙夫人」(『偵探談増刊) 虚無党』上海・開明書店 光緒三十年二月(1904)。一部既見)

2の陳景韓漢訳は著者を渡辺為蔵に誤る。その理由は推測することが可能だ。『国民新聞』掲載時に著者表記は蘆花生だった。しかし後の単行本『探偵異聞』には蘆花の名前がない。陳景韓は単行本を底本にしたから奥付に記載される「発行者渡辺為蔵」を著者とした。発行者と著者は違うと認識していただろう。だが作者名が書かれていないのだから渡辺為蔵原著としたのは苦肉の策だ。批判するほどのことではない。喋血生のように無視する方法もあった。底本の訳者表記ひとつとっても喋血生と陳景韓は態度が異なる。

刊年を見れば約1年の間隔がある。同一作品を漢訳して重複したのは偶然だと思う。陳景韓はすでに漢訳があることを知らなかったのだろう。喋血生漢訳についてもそういう例はいくつ

か見られる(別稿を参照)。

徐は「綺羅沙夫人」が「専制虎」とであると記述した。解説するまでもなく内容が同じということだ。両漢訳ともに蘆花日訳を底本にしているから同じ内容になるのは当然である。ただしそのふたつが一字一句違わない同一文章だとは書いていない。そこが重要だ。漢訳本文がまず異なる。また題名と登場人物名が両者では違っている(例: 愛聖夫人と綺羅沙夫人)。別人の手になれば自然にそうなる。不可解な点はない。

以上をまとめる。蘆花訳を底本として喋血生と陳景韓が別々に漢訳した作品があるというだけのことだ。

喋血生と陳景韓

ところが喋血生は陳景韓と同一人物だとする見解が複数の研究者から提出されている。上記徐兆璋の説明を根拠にしているのではないかと思う。

李艶麗「《浙江潮》1-3期上登載了署名“喋血生”翻譯的《専制虎》, 此处的“喋血生”已知是陳景韓, 因此可以推測《返魂香》的“喋血生”或許也是陳景韓」(『艶麗14-34頁])あるいは国蕊「即陳景韓」(『国蕊19B])である。ただし証拠を示していない。ゆえに徐の文章が根拠だと「思う」と述べた。

それに対して沢本郁馬(2015)*1が同一人物だとするならば漢訳の固有名詞も変えるのは不自然だと疑問を出した。喋血生と陳景韓は別人説である。

すこし加える。喋血生「少年軍(二)」が初出『浙江潮』第7期(1903)から『月月小説』第1年第9号(1907)に転載された。その際に社員(目次は社員旧著)「(軍事小説)少年軍(短篇)」と表示した(『梁艶16][梁王136]“社員”即喋血生)。漢訳を検討すれば転載時に文章を圧縮しているが固有名詞は同じだ(別稿参照)。訳者が同じだから変更する必然性がない。そういう例がある。それを踏まえれば喋

血生「専制虎」(1903)と陳景韓「綺羅沙夫人」(1904)に登場する人物名が異なっているのは訳者が別人である証拠のひとつだ。

この部分について異議を唱える人がいるかもしれない。陳景韓は松居松葉日訳『虚無党奇談』の「三、わが友伯爵夫人」冒頭部分を複数回にわたって漢訳しなおした。『新新小説』で「我友伯爵夫人」(1905)と抄訳「伯爵夫人(一)」(1907)および『月月小説』で「女偵探」(1908)である。題名を変更した。陳景韓が合計3種類も重複させた理由は不明だ。また「すとらと、のうすきー」伯爵夫人について名前を「水多羅」から「沙脱」「花脱」「奴斯夫人」へと書き換えた。ただしそのことが喋血生と陳景韓が同一人物である証拠にはならない。なぜなら陳景韓の書き直しは1905年以降のことであってそれ以前の事象に当てはめることはできないからだ。

くわえて陳景韓が上記漢訳に使用した訳者筆名を示す。冷、冷血であるのが一貫している。喋血生から冷、冷血では飛躍しすぎる。また陳景韓は「綺羅沙夫人」について原作者を「(日)渡辺為蔵氏原著」と表示した。それは間違いで徳富蘆花だ。しかし陳景韓が作者を明示しようとした点も喋血生とは異なる。喋血生「専制虎」は原作者名を明らかにしていない。

もうひとつ指摘する。喋血生が蘆花日訳から漢訳した「返魂香」「雌雄蜥」「専制虎」「攝魂花」は探偵小説だ。もし喋血生と陳景韓が同一人物ならばそれらを陳景韓の『偵探談』シリーズに収録するだろう。しかしその事実はない。陳景韓と喋血生は別人だから採集しなかったと考えるのが理にかなう。

さらに言う。喋血生の上記探偵小説は『浙江潮』に掲載された。一方で冷血(陳景韓)訳「明日之戦争」『江蘇』第4・7期(1903)がある。こちらも日本で刊行された雑誌だ。陳景韓が喋血生と冷血の筆名2種類を使用して『浙江潮』と『江蘇』の両誌に投稿したとは考えに

くい。

梁艷+王玉(2020)^{*2}は同一人物説をとる研究者が証拠を示していないと述べる。では別人説を支持するのかもしれない。両者は別人だと説明する沢本論文には言及するだけ。問題提起については内容を検討せずに通過した。結局のところ状況証拠によって喋血生は陳景韓と同一人物である可能性が高いという[筆者覚得、陳景韓可能性較大]。

例えば陳景韓の筆名冷血と喋血生には「血」が共通することを指摘する。しかし意味が違う。冷血は冷たい血で静的だ。一方の喋血は血の海を踏んで行くと動的だ。別人の可能性が高い。また梁王はいくつかの要点を考慮に入れていないので説得力に欠ける。それは論者自身も認めている。

問題が存在していると勘違いしているだけではなからうか。喋血生「専制虎」と陳景韓「綺羅沙夫人」の本文を最初に確認することが研究の基本であり不可欠な手続きである。見れば両者はまったくの別物だ。同一人物説はとも成立しそうもない。反論するばあいは具体的な証拠を出す必要があるとっておく。

本稿においては喋血生「専制虎」の内容を検討する。

喋血生「専制虎」

蘆花は原作のとおり「大陰謀」を題名にした。ロシア虚無党が皇帝を暗殺しようという大陰謀だからだ。それを喋血生は「専制虎」とする。猛虎よりも残酷に国民を支配するロシア皇帝という意味になる。虚無党から皇帝へ視線をずらしたように感じられる。喋血生はそう改題したかったらしい。ただし虚無党の陰謀に挑む探偵ミカエルという内容構造に変更はない。

喋血生ははじめに内容説明の解説文を新たに加筆した。「専制虎の1篇はロシア虚無党が挫折した事件である[専制虎一篇。俄羅斯虚無党一段極英雄短氣之公案也]」と書いて最初から

結末を予告する。探偵小説についての理解が不足している。

目につくのは「本篇で訳したのも虚無党の事件だ〔此篇所訳亦虚無党中一段公案也〕」と「訳」を使っている個所だ。喋血生による漢訳作品には例外の「消露」(『申報』1907)を除いて「訳」の表示が見えない。ゆえにこちらは珍しい部類に入る。蘆花の名前を出すことができないのはしかたがない。しかしせめて底本が日本語翻訳「大陰謀」だと明記してもいいだろう。それもしていない。喋血生は底本を明らかにしないのが基本方針だった。

冒頭部分を原作、蘆花、喋血生から引用して示す(ルビまたは傍線省略。附録として陳景韓も添える)。

原作から引く。見れば蘆花が逐語訳しているわけではないことがわかる。原作の細部は省略して骨子を訳したといえる。まずそれを明らかにする。番号を振って下線を施した部分が蘆花の日本語訳に該当する。

【原作】①Count Obolensk had resided in London for a good many years. He occupied a magnificent house in the neighbourhood of Hyde Park, where he lived in almost regal style. He kept a retinue of servants. The furnishings and appointments of his princely abode were said to be unique; and he dispensed hospitality with a lavish hand. ②He was known to be wealthy, to be a member of a very old and influential Russian family, and at one time to have held a high political position in his own country. Here the general knowledge of his affairs ended; but there were vague and ill-defined impressions in the public mind that ③he had been expelled or had fled from Russia owing to some of those political causes which in Russia count for

so much, but which in most other countries, or at any rate in England, would be treated with contempt. But ④ whatever the reasons were which had induced the Count to take up his residence in London, those who enjoyed his acquaintance and hospitality did not allow themselves to be troubled by them. In his own country he might have been regarded as little short of Satanic in his iniquity for aught that the throngs of people who attended his receptions, his at-homes and parties, knew or cared. The majority of mankind, in its concrete selfishness and gluttony, thinks little and cares less about the personal qualities of those who minister to its sensuous gratifications; what most concerns it is the quality and nature of the giver's gifts. Let these be liberal and lavish, and nothing more is asked. In Count Obolensk's case it was universally admitted that he excelled as a host, that his benevolence knew no bounds, and he dispensed charity with a cosmopolitan open-handedness which was worthy of all praise. ⑤ Personally he was a handsome man, with the tact and refinement of a courtier, and the delicacy and deference of a true-bred gentleman. ⑥ He was a widower, with two grown-up daughters—Catherine and Nathalia—both handsome young women; ⑦ while at the head of his household, as general manageress, was an English lady, known as Mrs. Sherard Wilson, who, it was generally understood, had lived in Russia for a good many years.
pp.143-144

次を見てほしい。蘆花は上の番号に該当する

個所を翻訳した。省略の方が多いことに気づく。原作の意味をすくっているだけ。以下を見てほしい。〈 〉で示した個所は蘆花の加筆だ。

【蘆花】〈「つひ此の頃帰朝したる人の話なるが」と老探偵穴栗は話の端を啓きぬ。／「某帰朝者の話なるが！」〉／①英国龍動(ロンドン)府ハイド公園のほとりに壮麗なる屋敷を構へて目ざましき生活をなすオボレンスク伯爵と云ふ人あり。②もとは露西亜の歴々なりとか。③何か仔細ありて本国を追放されしとか出奔せしとか④何れとも定かならねど、兎に角数年前より龍動に來り住み、〈余程資産ある人なる可し、衣食住は贅沢の限りを盡して、殊に客を好み宴会饗応月に幾回と云ふことを知ず。年は五十をまだ越さず、〉⑤風采瀟洒として言語動作何處までも嫺雅に氣の利きたる取りまわし、〈十人が十人逢つて誉めぬ者なき〉立派な紳士なり。⑥夫人は早くに身まかりて、カテーリナ、ナタアリアとて二人の娘あり。何れ劣らぬ梅桜、〈伯爵家の両美人とて龍動交際社会に誰れ知らぬ者もなし〉。⑦此外には英国人にて井ルソン夫人と云ふく四十足らずの〉女ありて、家事一切の監督を司どりつ。此井ルソン夫人と云ふは、もと永らく露西亜に住みし人なりとか。212-213頁

冒頭の老探偵穴栗部分は蘆花が加筆した。この穴栗という人物は原作の設定ではミカエル・ダネヴィチである。ところが穴栗の語りの中で「露国随一の大探偵ミカエル」(231頁)が登場する。穴栗とミカエルが別人になってしまつて不都合だ。別の作品にもその例は見られる。蘆花は底本にとらわれずに自由に訳した。

蘆花日訳には省略が目立つとくり返す。

例をひとつ。伯爵がロシアを追放された理由について原作では次のように述べる。「ロシア

では非常に重要な意味を持つが、他の多くの国や少なくともイギリスでは輕蔑の対象として扱われるであろうものだ〔which in Russia count for so much, but which in most other countries, or at any rate in England, would be treated with contempt〕」。皮肉を伴う微妙な表現は日本の読者には不必要だと蘆花は考えたらしい。

反対に説明を加えた部分もある。オボレンスク伯爵が「年は五十をまだ越さず」とかウィルスン夫人が「四十足らず」などの年齢だ。省略と加筆が入り混じる。最初は物語全体の紹介だから簡潔に翻訳したということもできる。ここを見ただけでも忠実な翻訳というわけにはいかない。翻案である。

喋血生の漢訳は翻案をさらに改作している。

【喋血生】吾輩未曾遊英京倫敦。而設之于理想界。覺其莊嚴華麗極撩乱我眼花也。其哈德公園過數武。則俄伯爵阿蘭克之私邸在焉。伯爵旅于英。三閱寒暑。奢靡晏逸。人僅知其為逐于勢利場中人。惟好客如命。且熱心于慈善事。此亦不過富家翁之故智也。夫人早逝僅遺二女。伯爵視之。不啻掌中珠。其一切家事。有從一僕人口中呼出為愛聖夫人者掌之。141-142頁

吾輩はいまだかつてイギリスの首都ロンドンに行ったことはない。しかし理想界であるとすればその莊嚴華麗さが入り混じつて私は目がかすむと思う。そのハイド公園から数歩のところロシア伯爵オボレンスク(阿蘭克)の私邸である。伯爵はイギリスに來て3年になるが贅沢三昧だ。人は彼が權勢の場から驅逐されたことを知るだけ。非常に客を好み、かつ慈善事業に熱心なのも富豪の知恵にすぎなかった。夫人は早くに亡くなり娘ふたりを残しただけだから伯爵はそれをさながら掌中の珠のように見なした。一切の家事は使用人から井ルソン夫人(愛聖夫人)と呼ばれる人が掌握してい

た。

「吾輩」とは誰か。最初からつまづく。蘆花では老探偵穴栗だ。しかし「ロンドンに行ったことはない」のであれば穴栗(ミカエル)ではない。そうすると吾輩は漢訳者喋血生その人ということになる。訳者が冒頭に登場する必然性がないし言っている内容も意味がない。「数年前」を「3年」にしたのは許容範囲内だ。娘ふたりの名前を省略した。伯爵とウィルスン夫人の年齢も同様。蘆花日訳をさらに簡略化したことになる。

喋血生の「慈善事業に熱心なもの」は蘆花の「宴会饗応月に幾回と云ふことを知ず」にもとづく。しかし蘆花に「慈善事業」は出てこないところが原作にはある。「彼は国際的な気前の良さで慈善事業を行なった [he dispensed charity with a cosmopolitan open-handedness]」。喋血生が原作を知っていたはずはない。加筆をして原作と偶然に一致したものか。問題として残す。かといって蘆花日訳とずれている点は変わらない。

次に引用する陳景韓漢訳と比較してみれば喋血生が蘆花からかなり離れていることが理解できる。

【陳景韓】英国倫敦府。海杜公園旁。有壯麗之家屋。其主人名花波斯克。為一伯爵。本俄国籍。数年前。因犯事後被逐至此。／伯爵年近五十。風采瀟灑。性情嫺雅。一活潑之好紳士。家資亦盈富。衣食住三者。盡善盡美。性又好客。宴会月必数起。有夫人。早去世。遺有二女。長名克利奈。少名那脱立。均有艷名。倫敦交際社会中。無不知二女者。又有一英国婦。伯爵甚信任之。使之監督一切家政。家中咸称之為綺羅沙夫人。
33頁

イギリスはロンドンのハイド公園近くに壮麗な邸宅がある。その主人の名前はオボ

レンスク(花波斯克)という伯爵だ。もとはロシア国籍だったが数年前に罪を犯してここに放逐された。／伯爵は50近くで風采は上品、性格は優雅で活気あふれる立派な紳士だ。資産は豊富で衣食住は贅沢をつくり、客を好み宴会は月にならず数回は開く。夫人がいたが早くに亡くなり娘ふたりを残した。長女はカテーリナ(克利奈)、二女はナタアリア(那脱立)という。ともに美人で有名だからロンドン交際社会でふたりを知らないものはいなかった。またイギリス人の婦人がおり伯爵はとても信任して一切の家政を監督させていた。邸宅では井ルソン夫人(綺羅沙夫人)と呼ばれている。

底本の順序を少し入れ替えているだけ。ほぼ直訳とっていいだろう。

喋血生漢訳の文章は陳景韓のものとはまったく異なる。固有名詞も違う。オボレンスク(阿蘭克／花波斯克)、井ルソン夫人(愛聖夫人／綺羅沙夫人)である。ここからも喋血生と陳景韓が同一人物とするのは無理だ。

喋血生漢訳の検討を続ける

ウィルスン夫人は容貌秀麗、男勝りの性格で学問もあり数カ国語を自由にあやつり政論を好んだ。喋血生はそこはそのまま漢訳した[気宇軒昂。学問淵博。兼通数国語言文字。尤好談政治。2頁]。ただ夫人の年齢を「30ばかり[僅三十許]」に変更している。夫人の奇癖はひとりで旅行することだった。行き先も日時も秘密にした。

喋血生は夫人の奇癖にもうひとつ加えた。「ひとつは髪を結び顔を洗うときには必ずひとりで暗く光のない小部屋の中であった[一則梳洗時必独處于幽暗無光之斗室中]」(2頁)。蘆花にない記述を加筆する理由は物語の最後に説明される。夫人はいつも変装しているからそ

れを見られたくなかったとする〔夫人之奇癖。不欲人見其梳洗者。174頁〕。加筆して前後で辻褃をあわせた。またいつも変装していたという着想はほぼ同時期に発表した「攝魂花」にも使用されている。

これについてひとこと述べる。蘆花は「巢鴨奇談」でアメリカ人ヂオルヂについて「浴みするにも決して肌を人に見せしことなし」(8頁)と書いている。喋血生は漢訳「雌雄蜥」においてその個所を省略した。漢訳公開の時間は前後するが蘆花の独自表現をここで生かして使用したとも考えられる。

喋血生の漢訳は逐語訳ではない。蘆花日記の大筋をとらえながら自由に書き換える。

元旦に伯爵邸を訪問した世界各国からのロシア人来客は計「九百七十四人」(142頁)と書く。原作も蘆花にも人数までは記述してはいない。食後に伯爵と招待客たちは部屋にこもった。その部屋はカーテンで遮られ床にはカーペットが敷かれて音を遮断している。「室内には十二点の瓦斯燈をともし、之に薔薇色の笠を打被せれば」(216頁)とある。原作にはない表現だ。喋血生は「12個の紅バラの笠をつけた電灯がともされているのだけが見えた〔但見点着十二盞紅薔薇罩電燈〕」(143頁)としてガス灯を電灯に変えた。蘆花日記にもとづきながらの細かな改変だ。

この部屋で秘密の集会が開催されたのだった。人々が出て行ったあとひとりの男が部屋から出てきた。伏線のひとつだ。

【蘆花】主客共に件の密室を出で、より二十分あまりたちしと覚ふる頃、集会のありし其室の奥の窪所よりぬつと立出でたる男あり。

【喋血生】賓主星散之後。二十分。伯爵重至密室。忽眼光一閃。悦惚有人影自凹形耳房倏然遁出。四遍踪跡恰鷄犬不驚草毛不動。人耶魅耶。梁上君子耶。咄咄怪事。／伯爵

自慰之以眼眩。乃寢其事。 143頁

主客が散ってから20分後に伯爵はふたたび密室に行った。ふと目を光らせるとぼんやりとだが凹んだ小部屋から人影がぬつと出てきた。その動きは鷄犬も驚かず草毛も動かないほどに静かだ。人か物の怪か泥棒か。おお怪しい事よ。／伯爵は目がくらんだと自らを慰めるとそれで終わりにした。

喋血生の漢訳を読んで啞然とする個所だ。伯爵は侵入者を目撃しているではないか。スパイが見つかってしまっただけならこの物語は成立しなくなる。秘密会議を主宰する伯爵がそれを見逃すという描写も普通はありえない。ありえない方向に書き換えているから喋血生ははたして蘆花の日記を確かに把握しているのだろうかと思惑が生じる。小さな改変が探偵小説を破壊する。

もうひとつの例を示す。

令嬢が着飾って音楽会に出かけるころだ。使用人のひとりが階段につまずき持っていた大盆の茶、牛乳、湯などを令嬢の頭上からぶちまけてしまった。使用人は青くなっておろおろするだけ。ウィルスン夫人はそれを見て罵った。

【蘆花】気早の井ルソン夫人此態を見るより怒火心頭より発して、畜生馬鹿無用人と続けざまに罵りしつ。罵られてまごつく僕の顔見るも胸悪ろしと「馬鹿早く行かないか。お前が此家へ来てから、何時も何時も失策ばかり。幾何物を壊したか知れアしない。最早此れッ切りだよ。十分の内に出て往って貰ひましょ。エ分かつたかへ、十分の内だよ。出て往かなけりや、他の僕共に曳きずり出さすぞ」 220頁

【喋血生】而此時愛聖夫人見可憐可恨之情狀。幸而夫人是文明人。且英国無野蛮法律也。直痛斥一番。限十分鐘内將僕人驅逐而已。 144頁

この時井ルソン夫人は憐れで恨めしい情

況を見た。幸い夫人は礼儀正しい人だった。レイギリスには無茶苦茶な法律もなかった。じかに激しく叱って10分以内にその使用人を追い出したただけだった。

「畜生馬鹿無用人」を含む夫人の激しい罵詈雑言は削除してしまった。そればかりか「礼儀正しい人〔文明人〕」に書き換えて蘆花訳をゆがめている。その後で夫人と奴婢頭が粗相をした使用人について会話する場面もすべて切り捨てる。なんでもなさそうな描写が探偵小説では重要な意味を持っていることを理解していないようだ。

伯爵にしろ夫人にしろこの物語では極悪の人物に設定されている。スパイを見のがす間拔けな伯爵と心優しい夫人では小人物臭が漂ってくる。喋血生は悪い方向に改変した。

蘆花の翻訳は原作を省略して大筋をたどっているとすでに述べた。喋血生漢訳はそれをさらに間引く。

アレクサンドル2世暗殺事件に関係する部分を見る。

【蘆花】宮殿には兵士を昼夜張番させ、夜毎々に寝間を更へ、三度々々の食事は神明に誓を立てたる特別忠義の、料理方に調へさせ、大膳職の頭人が一々御前に於て毒味をなし、其毒味する頭人を宮内官五六人にて厳重に監視し、外に出づれば三步毎に憲兵巡查を立たせ、十歩に探偵を置く様にしてすら、厩歴山(あれきさん)二世陛下は虚無党の爆裂弾に崩じ玉ひぬ。 230頁

皇帝が厳重に警備されていた様子を蘆花は原作どおりに訳している。ただアレクサンドル2世が虚無党の爆裂弾で暗殺されたという語句は原作にはない。蘆花の加筆だ。当然のように疑問が生まれる。この「大陰謀」は大探偵ミカエルが虚無党によるロシア皇帝暗殺計画を未然に

阻止することが主題だ。皇帝が爆裂弾で死亡しては小説が成立しない。その矛盾に気づいていない。蘆花は知識があるから加筆したのだがそれは勇み足であった。そこを喋血生はどう漢訳したか。

【喋血生】嗚呼俄皇宮廷之日夜戒嚴。無待余嘖嘖也。俄皇膳。貴戚先嘗之。以備毒也。俄皇行。待衛環行也。以備刺也。俄皇之休息室。則憲兵巡查。昼夜拱立。而目不動。足不敢遺。以備爆裂丸之飛空直入也。 145頁

ああロシア皇帝の宮廷における日夜の厳しい警戒については私がぐだぐだ言うまでもない。ロシア皇帝の食事は親族がまず味見をして毒を防御する。ロシア皇帝が行くときには衛士が周りを巡ってからにして暗殺を防御する。ロシア皇帝の寝室は憲兵巡查が昼夜わかつたず立ち、目を動かさず足は離さずに爆裂弾が飛び込んでくるのを防御する。

訳者が登場しているように読める。余計なことだ。それは置いておいて喋血生はアレクサンドル2世暗殺の個所を漢訳していない。話の前後から判断して不相当だと気づいたからだろう。ここは蘆花よりも優れた処置である。

警備責任者のヴラソフスキー(Vlassovski/ヴラスワ"スキー/維拉伏克)大佐は大探偵ミカエル(Michael/ミカエル/米加野)を呼んで捜査を依頼した。

喋血生漢訳には不可解な部分がある。ミカエルを紹介して「まずロシアには大探偵ミカエルというものがおりすでに退職している〔先は俄国有大偵探名米加野者。已退老山林〕」(145頁)という。蘆花は「露国随一の大探偵ミカエル某」(231頁)と書いているだけ。喋血生はどこからミカエルが退役したと考えたのか。誤解である。「攝魂花」でも同様の記述をする。

現役だからこそ呼び出しを受けたと考えるのが普通だろう。

宮廷の図面を書いていた不審な衛士ヴラジミル (Vladimir/ヴラヂミル/断拉其末) を捕らえたという。衛士は死刑だという大佐にミカエルは釈放を提案する。死者に口はないが生者はしゃべるといわけ。「A dead man cannot speak; a live one can./死人に口なしですが、生きた者なれば喋舌ります/死者無言。而生者長喋喋也」

このヴラジミルを手がかりにして大探偵ミカエルの調査がはじまる。情婦つながりて虚無党のペトラナ夫人 (Madame Petrarna/ペトラナ夫人/倍蘭夫人) が浮かび上がった。喋血生は細部を間引きながら蘆花の大筋を漢訳する。

陰謀の首領は外国にいて操作していると見抜いてスイスのジュネーブ (Geneva/ゼ子ヴア/善奈維) に来た。

喋血生は蘆花にない部分を加筆する。

【喋血生】復覓大偵探。恰連影子都不見了。求之國門。遍搜不得。是日宮中市中。喧伝大偵探米加野被虚無党人謀斃。紛論幾五旬。以下第3期19-20頁

大探偵を探したが影すらも見えなくなっていた。国内に求めたが見つからない。その日宮中市中では大探偵ミカエルが虚無党人によって殺されたと喧伝された。議論は入り乱れてほとんど50日にもなった。

50日というのは蘆花が「大探偵ミカエルが飄然影を隠せしより五十日あまりも後の事なり」(240頁) と書いた部分にもとづく。そこを改変してこの加筆だ。しかし不自然である。なぜなら大探偵ミカエルが有名人になっているからにほかならない。読者には周知のミカエルだが一般の世界で知られた人物にするのはおかしい。普通、大探偵は関係者だけが知る存在だろう。

ジュネーブにロシア人が集まった。およそ50

人だ [At length there were nearly fifty persons present. p.161]。喋血生は人数を省略した。50名という大人数の虚無党員が集まったという恐ろしさが消失した。

舞台はサンクトペテルブルク (St. Petersburg/聖彼得堡 (セントピータースバルグ) /聖彼得堡) に移る。

結末はあっけなく訪れた。ウィルスン夫人は書店で開かれた会議に参加した60名とともに官憲によって全員が逮捕されたのだった。虚無党側の完全敗北である。どさくさに紛れて現われた大探偵ミカエルに「あなたが井ルソン夫人ですな [貴君乃愛聖夫人]」(175頁) と言わせたのは喋血生による独自の加筆だ。

結 論

喋血生は自由に改変する。翻訳というよりも翻案だという理由だ。それにしてもこの「専制虎」をなぜ選択したのかは大きな謎である。なぜならロシア皇帝暗殺に成功する小説ではないからだ。反対に虚無党にとっては失敗した案件なのだった。

喋血生「少年軍 (二)」ではイタリア軍は負けているにもかかわらず大勝利したことに改変した。そうしなければ負傷した少年兵を英雄だと称賛できないのが理由だ。自分の主張を貫くためには底本の結末を平気で書き換える。

「専制虎」でも同様に大探偵ミカエルの捜査を切り抜けて虚無党が皇帝暗殺計画を実行し成功したとしてもよかった。蘆花が追加した個所に「垂歴山二世陛下は虚無党の爆裂弾に崩じ玉ひぬ」とあるではないか。それを生かした漢訳に改変することも可能だ。

しかし喋血生はそうはしていない。該作品では資金援助をしていた伯爵も含めて虚無党員全員が無抵抗で逮捕された。喋血生はせめての抵抗を示したいと思ったものか「血戦がひとしきりあり半数が脱出し半数が逮捕された [血戦久之。脱者半。獲者半]」(173頁) とわずかに

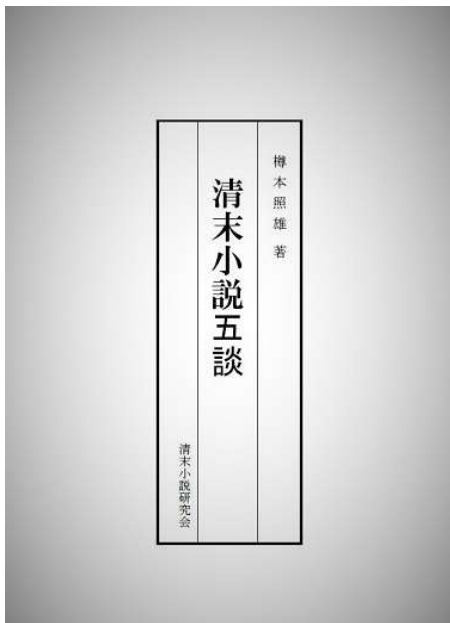
書き加えたにすぎない。

ロシア皇帝を守る側ではなく虚無党から見た作品がある。ウィリアム、ル、キュー原著、松居松葉『虚無党奇談』（警醒社書店1904.9.20）だ。喋血生が翻訳活動をしていた時期に刊行された。松葉日訳にもとづき冷（陳景韓）が4種の雑誌に1904年から1909年にわたって断続連載している。特に喋血生「少年軍（二）」を転載した『月月小説』にも掲載されていることに注目する。該雑誌第13-21号（1908.2.8-九月）に見える陳景韓漢訳「女偵探」「爆烈弾」「俄国皇帝」である。

この松葉訳『虚無党奇談』こそ喋血生が好みそうな反政府の虚無党を描いたものだ。だがすでに陳景韓の漢訳がある。喋血生は敢えて別に漢訳する気にはならなかったらしい。 ㊦

【注】

- 1) 沢本郁馬「『綺羅沙夫人』の原作」『清末小説から』第118号 2015.7.1
- 2) 梁艶+王玉「喋血生：曇花一現的清末小説翻訳家」『清末小説から』第136号 2020.1.1



喋血生「消露」について

沢本 郁馬

はじめに

喋血生の漢訳小説7篇は日本で刊行の雑誌『浙江潮』第1-9期（1903）に掲載された。使用した底本は日本語（徳富蘆花と原抱一庵）である。またそれらにはすべて欧米の原作があった。日本語経由の重訳だが「訳」とは表記しない。清末の翻訳小説では普通のことだ。欧米原作の日訳だから小説の場所は外国だし登場人物も基本は西洋人である。漢訳もそれを反映している。読者は翻訳だと自然に理解する。

それらのなかの1篇は風変わりだ。「雌雄蜥」という。これも「訳」とは表示していない。底本は徳富蘆花「巢鴨奇談」（1900）である。蘆花がディック・ドノヴァン DICK DONOVAN の英文原作「死んだ手の手がかり [THE CLUE OF THE DEAD HAND]」（1897）を換骨奪胎して舞台を日本に移設した。アメリカ人を同道して帰国した人物にまつわる殺人事件だ。ゆえに登場するのはそのアメリカ人を除いてはすべて日本人になっている。喋血生は場所を日本から中国に変更した。アメリカ人、フランス人も出てくるが主として中国人のみ。そこから漢訳ではなく創作だと考えた読者がいたかもしれない。

1903年から4年間の空白時間がある。1907年になって喋血生は新作1篇を上海で公表した。

『申報』連載の「消露」だ。日本語底本があることを匂わせる。こちらは欧米作品とは関係がない。「訳」を記す。登場人物全員が日本人というのも以前の漢訳作品とは異なる。

喋血生「消露」

新聞連載は次のとおり。掲載の詳細は注に示す*1。

喋血生訳「(軍事小説)消露」全19回『申報』
光緒三十三年五月二十日一六月二十五日
(1907.6.30-8.3)

冒頭部分から引用する(末尾の「6.30付」は該紙陽暦6月30日掲載を示す)。

【喋血生】語云。燕雀安知鴻鵠志。蛟龍詎与犬羊争。大凡英雄豪傑之設謀建業。沈毅韜晦。別有深心。非功成事就。断不使庸輩窺其雄図遠志。而亦断不為庸輩所見諒。迨匣劍化龍。破壁[壁]飛去。而后神驚鬼泣。歎其雲鱗霧爪。肉眼難覩。 6.30付

小さな燕雀はどうして巨大な鴻鵠の心がわかるだろうか、巨大な蛟龍はどうして小さな犬羊と争うだろうか、などという。およそ英雄豪傑が画策し実行しようとするには、沈着剛毅にして包み隠し特別に深い考えがある。偉業が成しとげられなければその雄大な計画、遠大な志について凡人に窺わせることは絶対になく、また凡人が理解することも絶対がない。箱の中の劍が龍となって壁を破り飛び出してからあとになって大声で泣きわめき、隠し立てしているのだから凡人には見えないと嘆くのだった。

日本参謀総長が構想準備した壮大な計画は凡人の理解を超える。小説の主題を漢語の慣用句を使用して説明した。喋血生の作文である。作品の内容を紹介するいわば「前書き」を冒頭に置いた。そうする例は喋血生漢訳作品によく見

られる。

続いて本作品の要点を告知する。日本陸軍参謀総長謙吉が日露開戦に備えた。謙吉は部下の田俊と貞雄を満洲に派遣し、ロシアが行なっている極東経営の実態を探偵させる。これが小説の主筋だといっている。

前書きを読めば本作が軍事探偵を主人公とする物語だと読者は思うだろう。軍事探偵とは関連現地における軍事上の情報収集、謀略工作を担当する軍人をいう。別のことばでいえば特務機関、軍事情報工作者、軍事スパイなどだ。

内容のおおよそを紹介する。注目点のひとつは喋血生が前書きで示したとおりの作品であるかどうかだ。

小説の時間は日露戦争6年前に設定される。日本参謀総長謙吉は自宅に貞雄(陸軍騎兵中尉。26歳)を呼んだ。総長は個人の名誉を差し出せと言う。貞雄が承諾すると総長は大金を渡し放蕩の限りをつくせと命令した。しかたなく赤坂の妓楼に登る。そこで知り合ったのが秋勁と名乗る妓女だ。彼女は総長謙吉を憎んでいた。また行方不明の兄がいるという(これが物語の伏線)。

新聞には貞雄が総長に罷免された売国奴、ロシア探偵(露探)だと攻撃する記事が載った。ついには貞雄の妹温卿が夫の吉田砲兵大尉から離縁になる。

貞雄は総長から秘密の軍令を受けて遼東半島の旅順に渡る(放蕩三昧を命じられたのは軍事探偵となることを社会から隠蔽するための偽装だった)。遼東缸瓦塞で薬売りをやっている田俊(第2師団第5区隊長で参謀部に入る。妹がいる)の存在をあらかじめ知らされている。田俊を探すと営口で馬賊になっていた。貞雄と田俊のふたりは東三省におけるロシアの軍事情報を収集して帰国した。

長崎に上陸すると総長がすでに死去していることを新聞報道で知る。貞雄に活動を命じた人物がいなくなった。彼は参謀部に調査実録を届

けることによって自らの任務を完遂することにした。田俊は時間を約束して総長銅像の前で貞雄を待つ。時間切れで実録が受理されなかったと判断した田俊は自刃しようとする。総長を偲びに来た女性が田俊を押しとどめた。貞雄の妹温卿だ。

貞雄の方は時の参謀総長に説明して理解を得ることができた。田俊に会いに行けばそこに妹がいる。事情を聞くと妹は前の総長から貞雄の秘密活動を知らされていた。また秋勁は総長の死後に相州(神奈川県)で小学校の教員になったという。問い合わせると秋勁は入水自殺したとのこと。田俊は妹の行方がわからないまま帰郷することにした。途中の宿屋で入水未遂の女性に出会う。彼女こそが妹(源氏名秋勁。本名青鎖)だった。貞雄と秋勁は結婚した。

題名「消露」の露はロシア(露西亞)を意味している。「日出露消」であれば太陽が出ると露が消えるという意味だ。ことばを入れ替えているから日本が出てきてロシアを消滅させる、となる。物語は角書の「軍人小説」が示すように日露戦争を準備する日本参謀部の秘密活動があることを背景にしている。

だが粗筋を見ればその内容は題名と角書、また前書きで示唆されたものとは異なる。軍事探偵小説であると決めつけることはできない。

楓村居士『橘英男』との関係

喋血生「消露」を読んでわかることがある。物語の大筋が日本の楓村居士(町田柳塘)著『(軍事小説)橘英男』(1905)^{*2}によく似ている。角書「軍人小説」が共通する。

『橘英男』が実際にもとづいた小説であることは周知のことだろう。橘英男が軍事探偵として満洲で活躍する様子を躍動感をもって描写している作品だ。木村毅が実在人物を特定する文章を書いている。

両作品の類似する個所を示す。

作品冒頭で参謀本部総長水本操が橘英男と名

誉について話す場面を見てみよう。「消露」では総長謙吉と貞雄の会話だ。

【橘英男】主『どうぢや、まだ解らんかな、生命以上の物が……解らんければ説明せう、貴様の名誉をくれいちう事じや、軍人たる体面を保つべき名誉、それを吾輩にくれいと頼むのぢや。 3-4頁

【喋血生】(総長)曰爾知有否諸性命尤重之物且為軍人更不可須臾離之物。対曰。名誉。総長漫応曰。爾言誠然。 7.2付

(総長)「生命よりもとりわけ重いもの、かつ軍人には瞬時も離すことのできないものがあるとお前は知っているか」「名誉です」「お前のいう通りである」総長はさりげなく答えた。

上の個所についていえば喋血生「消露」は『橘英男』とほぼ同じといえることができる。

概要はこうだ。総長の命令で鷹の放蕩者となり名誉を傷つけられたまま軍事探偵として満洲へ渡る。秘密活動を終えて帰国するが総長の死去により秘密を知る者がいなくなった。とりまく人物に主人公の妹と姪女がいるのも両作品ともに一致している。ただし結末個所が違う(後述)。

主要登場人物も『橘英男』と「消露」では基本のところ合致する部分がある。参謀総長水本操が謙吉、橘英男が貞雄、馬賊の長谷部鼎が田俊、英男の妹千枝子が温卿、芸妓の小初が姪女秋勁に相応する。

しかし『橘英男』を漢訳して「消露」になったということではできない。異なる個所がいくつもあるからだ。

最初に気づくことがある。「消露」に登場する人物名が『橘英男』とは違う。喋血生作品では謙吉、貞雄と名ばかりで姓を示さない。違和感があるのは田俊だ。別の個所では「田俊義宏」(8.3付)と記載する。田俊は姓扱いだ。「俊

田」という名字はある。しかしその逆だから日本人らしくない。田が姓で俊が名、義宏は字という意味であれば中国人になってしまう。

いずれにせよ謙吉、貞雄とならべて田俊では不均衡である印象を免れない。妹温卿の夫が「吉田」砲兵大尉という個所だけ例外的に日本風だといえる(吉田は『橘英男』に出てくる)。しかし女性の温卿、秋勁となるとまるきり中国人だ。

相違点はそればかりではない。

橘英男は日本から天津経由で満洲に入った。だが貞雄の渡航先は旅順に変更されている。英男の妹千枝子は独身だが貞雄の妹温卿が既婚者であるのも異なる。英男は天津行きの船上で中国人とその日本人妻に出会った。しかし「消露」にはそのふたりは登場しない。また『橘英男』の馬賊呉来峰に当たる人物も「消露」にはいない。

英男は満洲で2年間の諜報活動を終えてひとりで帰国した。ところが総長が死去しており現役復帰のめどが立たなくなった。某省の要職につく人物が英男を呼んで事情を聞く。誤解がとけ名誉を回復した英男は軍人として戦地に出発する。それを見送ったのは千枝子と小初だ。軍事小説らしい『橘英男』の結末である。

しかし「消露」では帰国したのは貞雄と田俊のふたりだ。貞雄の名誉が回復された個所は『橘英男』に似ている。だが一緒に帰国した田俊の存在が宙に浮く。しかも小説の最後は秋勁が田俊の妹であることが明かされて貞雄と結婚する。橘英男は出征したが貞雄は秋勁と結ばれた。「消露」の締めくくりが『橘英男』とは決定的に異なる。

「消露」は『橘英男』の大筋をなぞっていないが細部と結末が違うことがわかるだろう。

「消露」のこと

喋血生「消露」に次の説明がある。「露探(日本訳俄羅斯為露西亜以下従名)」(7.4

付)。露探とはロシアのために働く探偵(スパイ)を意味する。当時の日本では罵り語として使用された。ロシアは漢語で俄羅斯だが日本語では露西亜だから以下はそれに従う、とわざわざ説明している。日本語原文を尊重しているようだ。さらに「我日本」(7.21付)という表現も出現する。これも日本語原作があることを暗示しているように思える。しかし該当する作品は見つからない。

「消露」は『橘英男』をそのまま漢訳したものではない。これは事実だ。同時に粗筋が似ていることも否定はできない。影響を受けたという意味ならば関連性がある。

底本でなければ残る可能性はひとつだ。喋血生が『橘英男』を参照し独自に大幅加筆改変して「消露」を作り上げた。

たとえば作中で著者が口を出す場面がある。「貞雄の快樂は偽の快樂であることを私は知っている[吾知貞雄之快樂。偽快樂也]」(7.15付)

ここは喋血生の作文だということがわかる。

あるいは途中で寄港した威海衛において貞雄が感慨を述べる場面を見る。

【喋血生】夜入威海衛。……(中略)……

此甲午一役之古戰場。憑欄俯(文字鏡)弔。覺戰爭慘劇。歴歴如絵。四遠之影。(来遠、定遠、靖遠、威遠)千軍之魂。其沈其没。尚鬱鬱於驚波駭浪。未曾一吐冤氣耶。 7.17 付

夜、威海衛へ入る。……(中略)……ここは日清戦争(甲午之役)の古戰場である。欄干にもたれて深く弔う。戦争の惨劇がありありと絵画のように感じられる。(撃沈された軍艦の)四遠(来遠、定遠、靖遠、威遠)の姿と千軍の魂が水中に没してなおも荒波に鬱々としており、いまだに無念を晴らしてはいないのだった。

死去した人々を悼む沈痛な心情を静かに述べている。これは日清戦争に勝利した日本人の心境吐露ではない。破れた清国側に立った人の感想のように思う。

「消露」での描写の重点がどこにあるのかも問題だ。「軍事小説」といいながら軍事探偵が満洲においてどのように活動したかは具体的に説明しない。わずかに述べて次のとおり。

【喋血生】 田俊既得貞雄輔翼。朝夕計画。已易寒暑。而東三省之秘奥。露西亜之営国。忽已盡括入日本智囊中。翌年春。二人将戦東三省凶籍而帰。 7.27付

田俊は貞雄の助けを得ると朝夕計画してすでに1年が過ぎた。そうして東三省の秘密、ロシアの画策は日本の知恵袋の中に早くもすべて収まったのである。翌年の春、ふたりは東三省で戦うための凶籍を持って帰国した。

軍事探偵が主題であれば叙述をここまで圧縮しないはずだ。満洲(東三省)が舞台である。ロシア兵との闘い、別の馬賊との駆け引き、住民との接触などを詳述する個所だろう。またここには中国人がひとりも登場していないのも不可解だ。『橘英男』はその状況を具体的かつ詳細に描写している。そのまま漢訳すればよいだけのことだ。もともと喋血生は作家としての才能に恵まれている。書こうと思えばいくらでも腕を振るうことができる部分だ。それが見えなから違和感がある。

「消露」にはあるべきはずの描写が存在しない。わざと外した。喋血生は軍事探偵の具体的な活動状況を書くことに主眼を置かなかつたことを意味する。『橘英男』とは別の物語を提示することが目的だとわかる。

日露戦争に備えた軍事探偵の偵察活動は背景の一部に紛れ込ませている。主題ではない。そう考えればそれらの描写欠落は不思議ではなく

なる。

喋血生は『橘英男』の全体構造を参照したのは確かだ。人物設定などに喋血生なりの改変を加えて別物を新しく作った。すなわち総長謙吉が黒幕で彼に操られる日本人兄妹の2組を小説の基本に設定した。貞雄と妹の温卿、それと田俊と妹の秋勁(本名青鎖)だ。

その中の貞雄と秋勁のふたりこそが小説の主人公である。

小さいながら記述不備があることを説明する。

『橘英男』では石部金吉の英男が総長の命令で花街に行き芸妓小初と知り合う。「消露」はそれを参照して同じだ。ただし妓女秋勁には行方不明の兄がいることを書き加えた。兄という保護者を失った秋勁が妓楼で働かざるをえなかったという説明にもなる。納得できる改変だ。

ところが喋血生によるある書き換えによって「消露」には問題がひとつ発生する。物語結末部分に出てくる。秋勁は総長の死後に小学校の「教員」になったとした。これは不注意な記述だ。のちに教員になることが可能ならば兄が姿を消した時にもそうしただろう。自然に推測できる。妓女にならずとも経済的に自立できたことを暗示する。

ここは重要な個所だ。秋勁が妓女だからこそ貞雄との出会いがあった。もしも教員だったら、と考えればその機会が消失する。「消露」が小説として成立しなくなる危険性を内在させてしまう。読者に疑念を抱かせては好ましい叙述とはいえない。

貞雄と秋勁の接点として妓楼の存在が必須条件なのだ。ゆえに妓楼を残し物語の展開を保持するためには秋勁に教員以外の職種を割りあてて必要があった。

むつかしいことではない。『橘英男』にならって秋勁も赤坂で小間物店を開いた(211頁)とすればよかった。秋勁は兄を見つけることができず世をはかなんで入水自殺を図る、というのであれば筋はつながる。なぜそうしなかった

のか疑問が残る。

細かい個所だ。しかし物語の存続に影響を及ぼしかねない。喋血生はそれに気づかなかつたらしい。

漢訳「攝魂花」では作家としての腕の冴えを見せた。だが本作品のこの部分はそれとは隔たりがある。残念なことだ。

秋勁の兄こそが貞雄よりも前に満洲に派遣された軍事探偵田俊だった。秋勁は行方不明になった兄の行動を知らされていない。田俊も日本にいる妹の行方を見失っている。これが伏線となる。秋勁の本名青鎖が隠されているのも仕掛けのひとつ。貞雄と田俊の会話で秋勁が出てくるが源氏名だから田俊は自分の妹だとは気がつかない。周到に考えられている。その基本構成は喋血生が独自に創出したものだ。

田俊と秋勁を兄妹にしたことにより貞雄との人間関係が『橘英男』のばあいよりも緊密になった。彼ら兄妹4人の人的関係を軸にして物語が展開される。特に貞雄と秋勁の恋愛を小説の主題に設定したところが大きい改変だ。物語の最後に貞雄と秋勁が結婚することでその伏線は回収される。

「消露」は貞雄と秋勁の恋愛小説である。角書を「軍事恋愛小説」とすれば内容と一致するだろう。日清戦争後から日露戦争前という期間において、日本と清国を舞台にして繰り広げられた恋愛小説と見るのが妥当である。

結 論

喋血生が1903年に公表した漢訳の底本は徳富蘆花訳5篇と原抱一庵訳2篇だった。それらには欧米の原作がある。少年軍礼賛と探偵小説だ。だが「消露」は欧米の原作は存在しない。またその内容は恋愛を主筋とするところが異なる。

喋血生訳「消露」は日本語作品『橘英男』なしには成立しない。しかし日文をそのまま漢訳したものでもない。喋血生は『橘英男』を参照

して作品構成の基本を取り入れた。さらに細部を変更し加筆しつつ結末部分は異なる別作品に仕立てたのだ。『橘英男』は実在する軍事探偵の活躍を主題とする。しかし「消露」は軍事探偵が登場する恋愛小説に変更されている。日本語でいう「翻案」である。 罫

【注】

- 1) 明細：(一) 1907年6月30日、(二) 7月2日、(三) 4日、(四) 6日、(五) 8日、(六) 12日、(七-十) 14-17日、(十一) 21日、(十二) 23日、(十三-十四) 26-27日、(十五-十六) 29-30日、(十七) 8月1日、(十八) 2日、(十九) 3日。影印本。国立国会図書館所収。なお連載第1回の写真が次の論文に掲げられている。梁艶+王玉「喋血生：曇花一現の清末小説翻訳家」『清末小説から』第136号 2020.1.1
- 2) 楓村居士(町田柳塘)著『(軍事小説)橘英男』読売新聞日就社1905.4.10。初出は『読売新聞』1904.12.9-1905.3.4(未見)。国立国会図書館デジタルコレクション所収。漢訳『橘英男』がある。樽目録を参照のこと。

清末小説から

